

第6章 考 察

第1節 井岡地頭遺跡の方形区画遺構について

1. 方形区画遺構の概要

本節では、井岡地頭遺跡の発掘調査において検出された「方形区画」の性格について考察する。

この遺構の規模と特徴についてもう一度まとめておく。木遺構は北・西・南を「コ」字状の溝で囲まれた南北約50～60m、東西約25～34mの区画である。このうち調査で検出したのは北辺（東西24m）・西辺北半（南北26.5m）の溝であり、西辺南半および南辺の溝は調査区外に現存している。北辺は東寄りの一箇所で途切れ陸橋状を呈し、この箇所で溝は「横矢」状に屈曲している。土壙は明確には認められなかった。木遺構は丘陵辺部に立地し、遺構の東側は急崖となっている。水田面との比高は約20mである。溝底近くから出土した土師質環より、溝が埋没したのは11世紀末～12世紀初頭と考えられる。

区画内からは同時期の建物跡は検出されず、わずかに礎石の可能性がある礎群が出土したのみである。ただし、区画内の南半分は調査区外であり、未調査部分に建物跡が存在している可能性は否定できない。また、区画内で検出されたSD9は、その性格は不明だが平安時代の須恵器が出土しており、方形区画と同時期である可能性もある。もしそうであるならば、今回の調査範囲はもともと建物等が存在しなかった区画内の空閑地にあたるとも考えられよう。ここでは、未調査地に建物跡が存在するものととりあえず仮定したうえで、区画の立地や規模、時期など調査で得られたデータを基に、先行研究や類例を参照していくことにする。

2. 方形居館の分類と変遷

本遺跡例のような方形区画遺構の性格として、まず想起されるのは中世の「方形居館」であろう。西日本の方形居館を対象とした研究としては、中井均の論考がある（中井1987、1991）。中井は、発掘調査で検出された城館と考えられる遺構を集成し、以下のとおり分類した（中井1987）。

I タイプ：明確な大溝（あるいは土壙）によって区画されていないもの。II タイプ：明確な大溝（あるいは土壙）に囲まれる単郭のもの。III タイプ：明確な大溝（あるいは土壙）によって囲まれる、複郭・連郭のもの。IV タイプ：明確な大溝（土壙）によって囲まれ、かつ大溝や土壙に“横矢掛け”などの折れが認められる、城郭と同様の防護施設を有するもの。なおIIタイプとIIIタイプは、立地からさらに細分されている。

以上のように分類した上で、I タイプを「前館的なもの」、II タイプを「館」、III タイプを「館から城へ移行する段階のもの」、IV タイプは平地に立地しており「地表面で観察した場合、中世城郭と断定できる」ものと評価している。本遺跡例の場合、溝で囲まれた単郭であり、丘陵上に立地することから、上記分類ではII-b タイプに相当しよう。同じII-b タイプの例として、中井は大内城跡（第205図1）をあげている。大内城跡は標高約70mの丘陵上に位置し、水田面との比高は約20mである。発掘調査の結果、遺構は4期にわたって変遷し、方形居館の成立は12世紀後葉にさかのぼることが明らかとなった。区画の全体の形状は明らかではないが、南北両辺を画する溝および現存する土壙から、80m四方の方形と推測される。北辺の溝は幅2.2～3m、深さ0.5～0.6mほどで、溝の北側すなわち区画の外側には低い土壙を設けている。区画内からは複数の掘立柱建物跡が検出された。

大内城跡は、平安末期という成立時期、区画溝の規模、立地の点において本遺跡例と類似しており、比較材料として有効であろう。大内城について、村田修三は「平地の方形館のプランを要害性に富む地形を求めて移したもの」（村田1984、p163）と考え、館から城への発達過程にあるものと評価している。中井は、先述のとおりこれを館ととらえるが、台地上に営まれた大内城の立地は同館・郡衙・莊園莊家では見られなかった立地であり、莊園内における新権力すなわち武七団が、莊園自体を押領し、莊園を見下ろす台地端へ新たに屋敷を移したものと考えている（中井1987）。このように村田と中井は、II-b タイプは平地の方形居館（II-a タイプ）がそのまま台地上へ移ったものと評価しており、本遺跡例も同様の性格を持つものと考えたい。ただし、大内城跡からは土器・陶磁器類が多量に出土したのに対して、本遺跡例から出土した遺物量は、未調査地を考慮しても非常に

少ない。したがって本遺跡例は、日常生活を営んだ館的性格よりも、見張り所のような臨時的・非日常的な性格の方が強かったのかもしれない。

なお、II-aタイプの例として、中井は長原遺跡（第205図2）や觀音寺遺跡B地区（同3）の例をあげている。本遺跡例との比較のうえで注意すべき点の第一は、これらの区画構の規模である。觀音寺遺跡の溝は幅約2m、深さ0.9mであり、その規模は本遺跡例とほとんど変わらない。長原遺跡の溝も幅約4m、深さ約1.3mであり、鎌倉・室町期の城館の堀と比較すると貧弱である。すなわちこの段階では、溝の性格はあくまで区画溝ないし灌漑用水であり、防御は偶次的な要素であったと考えられる（中井1991）。第二は、区画全体の規模である。長原遺跡の区画は一辺109mと推定され、これは一町四方に相当する（中井前掲）。本遺跡例の場合、南北方向の規模は略測であるので確言できないが、四分の一町（27m）×半町（54m）の規模で企画された可能性も考慮すべきであろう。

以上のように、近年の中世城館研究の成果によれば、西日本における方形居館の成立は12世紀後半段階であり、ほどなく丘陵上へも展開して山城への発展過程をたどり始めることが明らかにされつつある。本遺跡例はこうした変遷のなかでも初期段階に位置づけ得るのではないだろうか。

3. 烏取県内における方形区画遺構の類例

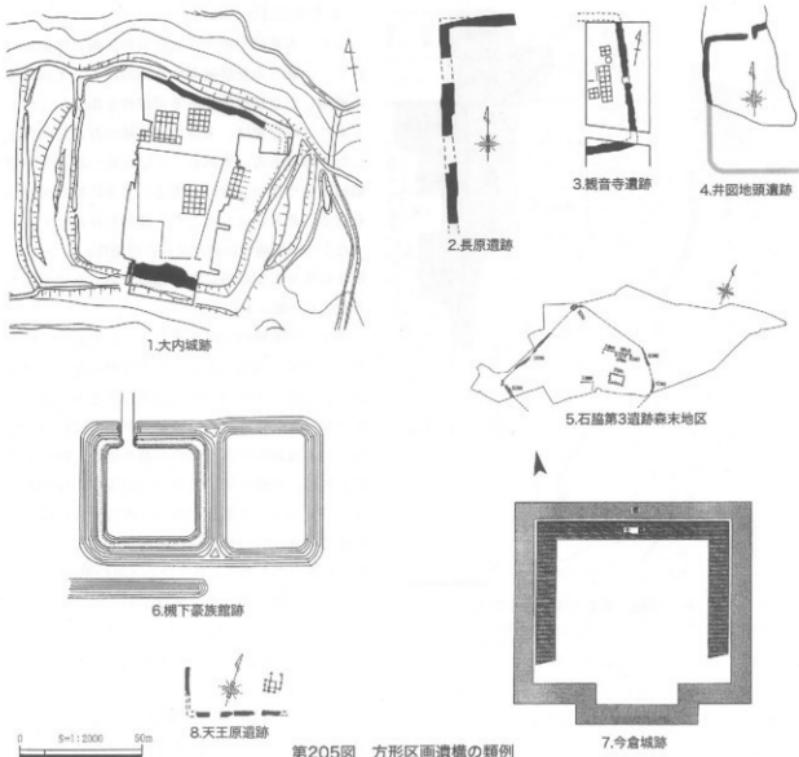
他地域の類例との比較から本遺跡例の性格について検討したが、次に県内の類例と比較してみよう。

県内で検出された方形区画遺構の類例をまとめたのが第205図および第102表である。石牆第3遺跡森木地区で検出された方形区画は、奈良時代～平安時代にかけて長期間に存続したと考えられるが、廃絶したのは12世紀代と推定されており、本遺跡例と時期は近い。ここで検出された溝の底面にはビットが並んでおり、また瓦がまとまって出土していることから、区画溝ではなく瓦葺の解なし柵例であろうと考えられる。遺構の性格については、瓦葺の建物を有することから官衙施設と考えられ、古代山陰道の推定ルートを見下ろす立地、あるいは遺跡所在地の地名などから、山陰道の筋賀駅と関連する可能性も指摘されている。また、長者屋敷遺跡例も、会見都衙の可能性があるが、一方で当地の豪族紀氏の屋敷跡という伝承もある。櫻下豪族館跡は、本遺跡から約2km東の東伯町櫻下に所在し、土塁と堀が現存している。「伯耆民談記」古城の部及び『櫻下神社由来記』に見える「岩野彈正坊」が居住した館に相当するものと考えられている。ただし、この岩野彈正坊なる人物については詳細不明である。また、遺構自体は発掘調査を経ておらず、時期は特定できない。今倉城跡は、「陰徳太平記」に「島田城」、「伯者民談記」に「今倉城」として登場する城に相当すると考えられている。土塁と堀の一部が現存していたが、その一部が発掘調査されている。史料によれば、この城は1579（天正7）年に吉川元春によって築かれ、文禄年間（1592～1596年）に廃絶された。文献史料によって遺構の性格のみならず築城者や築造時期等を詳しく知ることのできる稀有な例といえよう。天王原遺跡F区居館跡は、出土遺物から17世紀初頭に廃絶したと考えられる。区画内では建物跡が検出されている。

これらのうち、中世城館と考えられるのは本遺跡例・櫻下館跡・今倉城跡・天王原遺跡例であり、先の中井分類に照らし合わせれば、櫻下例は平地に立地する方形連郭でIII-aタイプ、今倉城跡は南側の張り出しを評価すればIVタイプとなろうか。中井の検討によれば、IIIタイプは14世紀以降、IVタイプは、先駆的な例もあるがおむね15世紀以降に盛行するようだ（中井1987）。櫻下館跡の連郭構造や、今倉城跡の幅7.2m、深さ3.6mという幅の規模は、本遺跡例と比較すると防御施設として充分に発展した様相を示している。なお、天王原遺跡例は、全形が明らかではない上に、16世紀代の遺構としては堀の幅が狭いことなどから、こうした発展過程に位置づけての評価は難しい。

以上みてきたように本遺跡例は、方形居館とすれば県内での最古例に位置づけられるものであり、当地域における中世城館の変遷を考えるうえで重要な資料になり得るものと考えられる。

4. 遺跡周辺の地名



第205図 方形区画遺構の類例

第102表 方形区画遺構 属性表

No.	遺跡名	所在地	規 模	堀の幅／深さ	年 代	文 献
1	大内城跡	京都府福知山市	80m×80m	2.2~3m/0.5~0.6	12世紀後葉	伊野他編1984
2	長原遺跡	大阪市	一辺109m	4m/1.3m	12世紀後葉	井澤也彌1978
3	觀音寺遺跡日地区	大阪府河原町	一辺55~60m	2m/0.9m	平安末~鎌倉時代	中村編1986
4	井庭池頭遺跡	鳥取県伯耆町	25m×約50m	2m/1 m	11世紀末~12世紀初頭	本吉
5	石庭第3遺跡森末地区	鳥取県伯耆町	一辺54m	—(幅もしくは柵)	~12~13世紀	牧本也彌1998
6	勇者屋敷遺跡	鳥取県東伯町	170m×80m	1m/0.3m	不明	岡本町教委1982
7	梶下豪族遺跡	鳥取県東伯町	50×40m, 50×30m	4m/3 m	不明	東伯町1998
8	今倉城跡	鳥取県香吉市	97m×82m	7.2m/3.6m	16世紀後半	真田船1983
	天王原遺跡F区	鳥取県見附市	一辺260m?	1.4~1.8m/0.7m	16世紀~17世紀初頭	新井編1993

今回の調査地が所在する字名は「下滝峯平」および「井図地頭」であり、直接城館の存在を示唆するものではない⁽⁴⁰⁾。ただ、本遺跡の東南約300mの丘陵下には、字「門田」がある。また、調査地から北方へ800mの田越集落付近には、丘陵上および丘陵先端に接して「上屋敷」「古城」「城山」の字名が残る。さらに調査地の北東約1kmにあたる現在の浦安集落付近には、「城山」「上居」「馬場」「屋敷」「市場」といった地名が集中しており、市を併設した館の存在が想定されている（中林1997）。これらの地名は、調査地が立地する丘陵地から浦安集落にかけて、複数の城館が存在していたことを示唆するものであろう。もちろんそれぞれの時期や実態については明らかにできないが、本遺跡例がこれらと関連をもつ遺構である可能性はきわめて高いのではないかと思われる。



第206図 調査地周辺の小字名

著国内の武士団としては、伯耆東部の小鴨氏や会見郡の紀氏が知られているが、東伯町付近の武士団についてはやはり史料が残っていない。櫻下館の「岩野氏」の問題も含め、当地域の武士団の動向を文献史料から跡づける作業は今後大きな課題である。

このように、現状では不充分な検討にとどまらざるを得ないが、文字史料が伝えない地域史の一側面に考古学的調査によって光を当てたことに意義を見出したい。類例の増加を期待しつつ、再論の機会を待ちたいと思う。

本報告にあたり、錦織 勲氏、山上雅弘氏、小都 隆氏、中四国中世城館検討会の諸氏、赤澤徳明氏から有益なご教示をいただいた。末筆ながら厚く御礼を申し上げる次第である。

(君嶋 俊行)

【註】錦織勤氏のご教示によれば、「かしら」は水脈に由来する地名である場合が多いという。

【引用・参考文献】

- 新井宏則編 1993 「天王原遺跡発掘調査報告書」会見町教育委員会
- 飯村 均 2001 「平安期・難倉洞の城館」『図解・日本の中世遺跡』小野正敏編、東京大学出版会
- 井藤 徹也編 1978 『長原』大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター
- 伊野近富他編 1984 「大内城跡」京都府遺跡調査報告書第3冊、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岸本町教育委員会 1982 「長者原遺跡発掘調査報告書」
- 真田広幸編 1983 「今倉城跡・今倉遺跡発掘調査報告書」倉吉市教育委員会
- 東伯町史編さん委員会 1968 『東伯町誌』
- 中井 均 1987 「中世城館の発生と展開」『物質文化』48、物質文化研究会
- 中井 均 1991 「中世の居館・寺そして村落—西国を中心として—」『中世の城と考古学』石井進・萩原三雄編、新人物往来社
- 中林 保 1997 「因幡・伯耆の町と街道」富士書店
- 中村淳蔵編 1986 「松原市觀音寺遺跡第2次発掘調査概要」大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター
- 牧本哲雄・原田雅弘・八峰興編 1998 「石塚第3遺跡 - 一森末地区 - 綾り地区 - 石塚8・9号墳 寺戸第1遺跡 寺戸第2遺跡 石塚第1遺跡」鳥取県教育文化財団
- 村田修三 1984 「中世の城館」『土木』講座・日本技術の歴史第6巻、永原慶二・山口啓二編、日本評論社
- ※第205図の出典: 1 (飯村2001)、2 (井藤1978) より改変引用、3 (飯村2001)、5 (牧本他編1998)、6 (東伯町1968)、7 (真田編1983)、8 (新井編1993) より改変引用

まとめに代えて

以上、本遺跡で検出された方形区画の性格について、山城への発展過程の初期段階として丘陵上に展開した方形居館である可能性を指摘した。もとよりこの想定は、未見の建物跡の存在を前提としたものである。当然のことながら、将来の調査如何によっては、今回の想定が完全に覆る可能性もある。あるいは、もともと建物が存在せず、まったくの空闊地を区画していた可能性、すなわち、現在の我々の認識外にある施設であった可能性も考慮する必要がある。

さて、本遺跡例が館跡であるとしても、これを営んだ主体の固有名詞については明らかにできない。大内城の主が自分の莊園を見下ろす丘陵上に館を築いたと想定されている(中井1987)のと同様に、本遺跡例を営んだのも調査地から眺望できる平野部に根拠を置いた勢力であることは間違いないであろう。加勢蛇川西岸は古代の方見郷の比定地であり、この付近に長講堂領である「久永御厨」があったと考えられている(東伯町1968)。た

だしこの莊園に関わる人名は伝わっていない。伯

第2節 井戸地頭遺跡における7世紀代の集落について

井戸地頭遺跡の調査では、7世紀代²⁰と考えられる遺構として、竪穴建物跡3基(SI1、SI3、SI4)、土坑6基(SK28・29・31~34)、溝2条(SD4、SD7)が検出された。これらの他、包含層・搅乱土中から同時期の土器が多量に出土したことを考え合わせると、本遺跡の消長において、7世紀代が大きなピークであったと評価できる。本節では、各遺構の編年的位置づけを整理し、遺構の特徴や周辺遺跡との関係などについてまとめることにする。

1. 各遺構の編年的位置づけ

まず、須恵器編年を基に各遺構の年代的位置づけを整理しておく。高広編年によれば、Ⅰ期(6世紀後葉～7世紀初頭)は壺類の外面に回転ヘラケズリ調査を残す段階、ⅡA期(7世紀初頭～前葉)は壺類が小型化する段階である。ⅡB期(7世紀前葉～中葉)につまみとかえりを持つ蓋が出現し、ⅢA期(7世紀中葉～末葉)で再び壺類が大型化する。さて、本遺跡から出土した壺身・壺蓋類には、ヘラケズリを残すものは非常に少ない。したがって、本遺跡に集落が本格的に展開したのはⅡA期以降であると考えられる。ただし、大型壺17・18などⅠB期に遡る可能性があるものも少量認められる。集落の下限については、壺蓋76などⅢB期(7世紀末～8世紀前葉)のもの、あるいは底外面に回転糸切瓶をもちⅣA期(8世紀中葉～後葉)以降に相当するものが少量あるが、方形区画が埋没する平安末期にいたるまでの消長は不明瞭である。

遺構の時期はⅡB期とⅢA期に集中している。ⅡB期と考えられる遺構はSI3、SK32・33、ⅢA期と考えられる遺構はSI1、SI4、SD4がある。これらのうち、SI3以外の時期判断は埋土中出土の遺物によるが、時期差をもつ遺物が混在している場合が多い。特にSD4の土器は、一括廃棄と思われる状況で出土したものではあるが、ⅠBないしⅡA期～ⅢA期までの土器を含んでいる。これらについては、廃棄に至る過程で何らかの特異な事情があったと考え、とりあえず最新相の遺物をもって埋没時期の上限と考えたい。ただし、高広編年をはじめ既存の編年の多くが横穴墓など墳墓出土の資料を基にしていることから、集落遺跡における遺構・一括遺物の組成が既存の編年と整合しない可能性も考慮される。今後は、集落出土資料をも加えたより整合的な地域編年の確立を目指す必要があろう。

出土した土師器の大半を占める壺形土器は、法量や形態にバラエティーがあるものの、製作手法は画一的である。すなわち、頸部が「く」字状に外反し、頸部内面には鋭い棱をもつ。胴部外面は継縫・斜位の刷毛目調整、内面頸部以下はヘラケズリである。この「く」字伏口縁の甕は外來系で、天神川下流域編年ではX期(MT15型式併行期)に出現するとされる。その後の型式変化は明瞭ではないが、今回SI3の床面から出土した45が須恵器と共に伴したことにより、編年上の一定点を得ることができた。

以上をまとめると、本遺跡出土の7世紀代の土器は、ⅠB期(6世紀末～7世紀初頭)～ⅢB期(7世紀末～8世紀前半)のものが認められ、特にⅡA期(7世紀初頭～前半)～ⅢA期(7世紀中葉～末)を中心とする。

2. 竪穴建物跡の特徴

竪穴建物跡のうち、遺存状況が良好であったSI1は約3.3m×3mの方形で、主柱穴配置は明瞭でない。時期的・空間的に近い類例として、第208図に上程第5・第6遺跡(大栄町)の竪穴建物跡を示した。これらはいずれもⅠA～ⅡB期のもので、SI1にやや先行すると思われる。平面プランは方形ないし長方形で、主柱穴は4本のもの(1、2)と2本のもの(4)がある。主柱穴の認められない(3)は鍛冶工房の可能性が指摘されている。4本柱穴のものでは中央に焼土面があり、その周辺から移動式窯や土製支柱が出土した例がある(2)。本遺跡のSI1は、これらの例と比較すると小型である。規模の違いが時期差を示すものなのか、あるいは住居や工房といった機能の違いを示すものかについては、ⅢA期の類例が乏しく明らかにできないため、今後の検討課題である。

3. 7世紀代における調査地周辺の様相

6世紀後葉～7世紀代は、各地で古墳の築造が終焉し、寺院の建立が進められた時期である。東伯町内におけるTK209～TK217型式期(高広Ⅰ～Ⅱ期)の古墳として、大法3号墳、代代1号墳、大高野1～3・5号墳、



第207図 遺構・遺物の変遷

東隣の大栄町では、上種第5・第6遺跡、向野遺跡などが調査されている。上種第5・第6遺跡ではおむねⅠ～Ⅱ期の堅穴建物跡が検出されている一方で、向野遺跡は掘立柱建物で構成された集落であり、Ⅲ期以降、すなわち7世紀末～8世紀前葉を中心とする。立地はいずれも丘陵上である。

以上のように、7世紀代の東伯・大栄町域では、三保遺跡・上種第5・第6遺跡など堅穴建物を中心とする集落と、向野遺跡など掘立柱建物を中心とする集落とを確認できる。前者が7世紀前半までに盛行したのに対し、後者は7世紀後半代を中心とする。本遺跡の集落は、堅穴建物を中心とする点は前者と共通するが、7世紀後半段階まで継続する点が特徴である。このような集落の動向は、斎尾庵寺の建立に象徴される時代の大きな変動と関係するものであろう。当該期の集落は調査例自体が少なく、今後の資料の増加に待つところが大きいが、占墳群や古代寺院などとの関連に留意しながら検討を進めていく必要がある。

(君嶋 俊行)

【註】従来「6世紀後半～7世紀代」とされてきた陶邑福年TK43型式～TK217型式を中心とする時期の層年代については、従来説より新しく見る見解もある（飛鳥・白鳳の瓦と土器）など）が、ここでは高古墳年の層年代観に従うこととする。なお、層年代をめぐる近年の研究動向については、「田 隆氏よりご教示をいただいた。記して謝意を表する次第である。

【引用・参考文献】

植野浩二 1981 「二保遺跡発掘調査報告書」 東伯町教育委員会

大賀靖浩・米原公子 1987 「森藤第1・2遺跡発掘調査報告書」 東伯町教育委員会

帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会 1999 「飛鳥・白鳳の瓦と土器一千年論」

牧本哲雄 1996 「伯耆東部の横穴式石室」「山陰の横穴式石室－地域性と福年の再検討－」 山陰考古学研究会

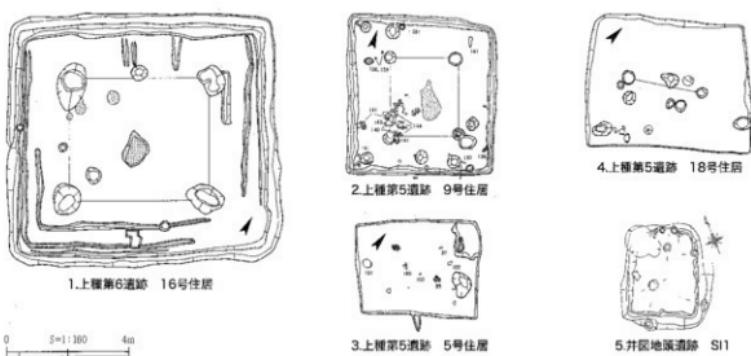
牧本哲雄編 2003 「飛見第3遺跡」 鳥取県教育文化財団

馬渕義則 1984 「向野遺跡、後ろ谷遺跡発掘調査報告」 大栄町教育委員会

馬渕義則・根鈴智津子 1985a 「上種第5遺跡発掘調査報告」 大栄町教育委員会

馬渕義則・根鈴智津子 1985b 「上種第6遺跡発掘調査報告」 大栄町教育委員会

*第208図の出典：1.4は（馬渕・根鈴1985b）、2.3は（馬渕・根鈴1985a）より改変引用



第208図 7世紀代の堅穴建物跡（東伯・大栄町域）

第3節 島取県内出土の石錘について

1.はじめに

井戸頭遺跡では打欠石錘17点、有溝石錘1点が出土している。石錘の多くは漁撈用の錘と考えられ、人々が漁業活動に従事していたことを示す遺物とされる。四方を海に囲まれている日本列島では人々の社会的営みの中で漁業が大きな役割を果してきたことは言うまでもなく、水産資源が豊富な日本海に接する山陰地方においてはなおさらである。しかし、この地域の古代における漁業活動に関する研究は低調であると言わざるを得ない。そこで小稿では、島取県内出土の石錘を整理することで当地域の漁業活動の復原に迫る基礎作業をしたい。

2.形態分類

島取県内において石錘を出土した遺跡は、管見に及ぶ限り、59遺跡を数え、その数量は1200点を超える。渡辺誠氏による分類(1973)を参考に、県内出土の石錘を分類すると以下のようになる(第209図)。

①打欠石錘 A類：長軸の両端を打ち欠くもの B類：長軸と短軸の3箇所、もしくは4箇所を打ち欠くもの

②切目石錘 A類：長軸の両端に切込みを入れるもの B類：長軸、短軸の4箇所に切込みを入れるもの

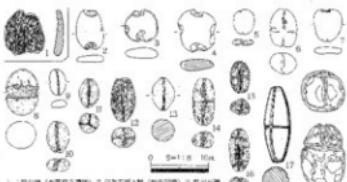
C類：長軸両端を打ち欠き、その後切込みを入れるもの

③有溝石錘 A類：長軸にのみ溝を施すもの B類：長軸と短軸両方に溝を施すもの C類：短軸に幅広の溝を1条施すもの D類：中央よりやや上半の短軸に溝を1条施し、それをつなぐ長軸の溝を有するもの

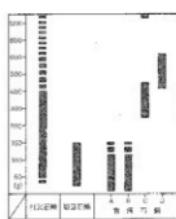
切目石錘についてA、B類はそれぞれ渡辺氏による分類A、B種に対応し、B種に関しては日本列島においても出土例が少ないとされる(渡辺1973)。県内でも唯一島取市布勢第1遺跡で1点みられるのみである。C類は、打欠石錘と切目石錘の両特徴をそなえるタイプである。今のところ北条町島遺跡、智頭町市瀬小若荷谷遺跡で出土例が知られるにすぎないが、北陸地方で確認されていることは注目される(山本1988)。有溝石錘についてA類は、さらに、溝がI：1条のもの、II：多条のものに細分することができる。IIは溝がY字状、もしくは十字状をなすものがある。B類についても短軸の溝がI：一条のもの、II：多条のものに細分される。Iは長軸溝が1条のものが主体となるが、Y字状、十字状をなすものもある。米子市青木遺跡出土の大型のもの(図209-17)について下條信行氏は九州型石錘の範疇で捉えている(下條1989)。また、弥生時代のA・B類について下條氏は九州型石錘小形A型にあてているが、県内では九州型石錘に特徴的な孔を穿ったものはみられない。揚子江型石錘と呼ばれ、中国大陆の揚子江中・下流域を中心に発達したものである(渡辺1973)。その意味では他の有溝石錘とは区別して捉える必要があるかもしれない。また、この形態は短軸2条、長軸1条の溝がキ字状になるのが基本であるが、陰田第1遺跡のものは短軸溝3条、青谷上寺地遺跡のものは短軸溝2条以外に一周しない短い溝がみられる。C類は瀬戸内型石錘と呼ばれ、やや扁平な卵形を呈し、きわめて齊一性に富む(和田1985)。D類は、中部型石錘の範疇で捉えることができる(和田1985)。この形態は下唇卵形の本体にくびれを設けて結合装置とするところが基本であるが、県内出土のものは長梢円形を呈し、長短の溝が逆T字状をなす。

3.時期変遷

縄文時代の石錘は、中期後半に切目石錘が土器片錘から材質転換することで誕生し、後期前葉には切目石錘A

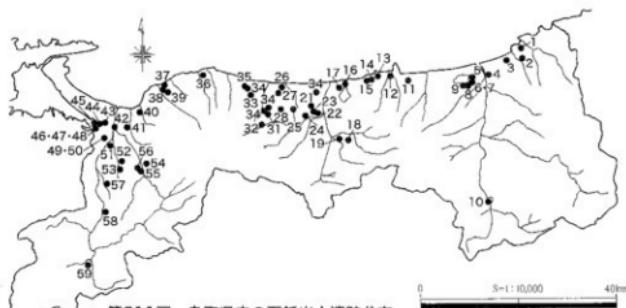


第209図 石錘各類型



第210図 石錘重量比較

類から有溝石錘A I類が、後期中葉には有溝石錘B I類が出現すると考えられている(渡辺1973)。打欠石錘は古くは米子市上福万遺跡で早期の押型文土器と共に伴しており、縄文時代全時期を通じてみられる。切目石錘C類について時期を特定できる島遺跡出土のものは北白川上層式、もし



第211図 鳥取県内の石鏟出土遺跡分布

第103表 鳥取県内の石鏟出土遺跡一覧

地城	No.	遺跡名	立地	時代	出石遺物				石鏟				古村	備考			
					佐原	武山	土器	その他	打刃石鏟	切口石鏟	打欠石鏟	その他	山田井	伊賀井	大沢井	その他	
東部	1	小河内遺跡	丘陵側	縄文	0	0	10	4	14	0	0	0	6	0	0	8	34
	2	弓削遺跡	低地	縄文後期	0	0	1	95	64	28	5	0	6	2	0	0	92
	3	山田井遺跡	低地	縄文後期													
	4	秋山遺跡	平野	縄文	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1
	5	中瀬原ノ遺跡	低地	縄文後期	0	0	0	20	27	0	0	0	0	0	0	0	20
	6	石山遺跡	低地	縄文					32	5	2	1					49 縄文・かご
	7	舟形山2号遺跡	低地	縄文	0	0	9	9	5	3	2	1	5	0	0	0	11
	8	丘上遺跡	低地	縄文後期	1	1	0	26	28	2	0	0	6	3	9	21	30 縄文・かご
	9	山田井2号遺跡	丘陵上	縄文	2	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	3
	10	中瀬原1号遺跡	丘陵	縄文	0	0	3	4	1	6	0	0	0	0	0	0	7
	11	中瀬原2号遺跡	丘陵	縄文	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	12	青谷1号遺跡	丘陵地	縄文	0	0	1	81	2	0	0	82	0	0	0	0	34
	13	鹿谷1号遺跡	丘陵地	縄文	0	0	0	1	1	0	0	0	3	0	0	0	1
	14	寺内2号遺跡	丘陵斜面	縄文後期	2	0	0	1	3	0	0	0	2	0	0	0	1
	15	石塚遺跡	丘陵上	縄文中期	1	1	0	1	3	0	0	0	3	0	0	0	3
	16	南郷山ヒツリ遺跡	丘陵上	縄文中期	5	0	0	0	5	0	0	0	4	0	0	0	1
	17	三日月山ヒツリ遺跡	丘陵上	縄文中期	1	0	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	2
	18	三日月山2号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1
	19	丸山遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1
	20	鳥孟跡	丘陵地	縄文	0	0	0	24	68	4	2	0	64	1	3	6	74
	21	人ノ山遺跡	丘陵上	縄文	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	22	足利山遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	3
	23	足利山2号遺跡	丘陵上	縄文	2	0	0	3	25	0	0	0	0	0	0	0	25
	24	佐原遺跡	丘陵上	縄文中期	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	25	大久保遺跡	丘陵上	縄文中期	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	26	新谷1号遺跡	丘陵上	縄文中期	0	0	0	15	15	0	0	0	0	0	0	0	15
	27	音吉1号遺跡	丘陵上	縄文後期	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	28	足利山3号遺跡	丘陵上	縄文	3	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	3
	29	上原山遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1
	30	大久保2号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1
	31	上日向1号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	3	3	0	0	0	3	0	0	0	3
	32	後山1号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	3	3	0	0	0	2	0	0	0	3
	33	新郷遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	34	片山1号遺跡	丘陵上	縄文中期	0	2	0	14	17	0	3	0	16	0	0	0	38
	35	新谷2号遺跡	丘陵上	縄文中期	0	0	0	2	2	0	0	0	2	0	0	0	2
	36	新谷3号遺跡	丘陵上	縄文中期	0	0	0	2	1	0	0	0	1	0	0	0	1
	37	山田井遺跡	平坦地	縄文	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	38	芦原山1号遺跡	丘陵地	縄文	0	0	0	5	1	0	3	1	0	0	0	0	5 未発見あり
	39	東名山遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1
	40	芦井1号遺跡	丘陵上	縄文	9	2	0	30	8	0	2	2	15	0	0	0	32 縄文・かご
	41	芦井2号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1
	42	音吉2号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	43	由之内遺跡	丘陵地	縄文	0	0	0	3	2	0	1	0	3	0	0	0	3
	44	日久山遺跡	丘陵地	縄文	0	11	0	96	109	0	3	0	2	0	0	1	2
	45	日久山2号遺跡	丘陵地	縄文後期	0	0	1	435	435	0	0	1	0	0	0	0	435
	46	久居第一遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	25	25	0	0	0	25	0	0	0	25
	47	久居第二遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	20	20	0	0	0	20	0	0	0	20
	48	久居第三遺跡	丘陵地	縄文	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	14
	49	古山1号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	3	1	0	2	0	2	0	0	1	3
	50	古山2号遺跡	丘陵上	縄文後期	0	1	0	4	5	0	0	0	2	2	0	1	3
	51	大瀬戸1号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1
	52	大瀬戸2号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	6	6	0	0	1	0	1	0	0	6
	53	大瀬戸3号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1
	54	西山1号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	2	3	0	1	0	1	1	0	1	3
	55	宇治平野遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2	0	0	2
	56	鍋川1号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	1
	57	鶴山遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1
	58	中瀬原2号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	2	1	0	1	0	1	0	0	0	2
	59	中瀬原3号遺跡	丘陵上	縄文	0	0	0	2	1	0	1	0	1	0	0	0	2

くは彦崎KII式の土器と共に、後期の所産と考えられる。有溝石鏟は県内ではA I類のみがみられ、B II類の出土例は確認されていない。また、北条町島遺跡出土の有溝石鏟A I類は船元式の土器と共に伴しており、有溝石鏟が中期のうちに存在していた可能性は高い。弥生時代に入ると切目石鏟はほとんどその姿を消し、打欠石鏟と有溝石鏟がみられる。なかでも有溝石鏟は独自の発達を遂げ、とくに後期を中心地域色をもつ特徴のものが展開する。県内ではA I類が繩文時代に引き続き存在すると考えられるが、前期のものは確認されていない。A

II・B・C・D類は弥生時代に入って新たに出現する。C類は中期後葉から後期にかけて盛行すると考えられ、青谷上寺地遺跡では中期中葉に比定されるものが出土している。D類は後期から古墳時代前期に盛行するとされるが、県内では詳細な時期を特定できるものはない。古墳時代では九州型石錘は中期以降も存続し、後期までみられるるとされるが(下條1985)、県内では中期以降の有溝石錘は確認されておらず、前期のうちに収束すると考えられる。打欠石錘は堅穴住居内から出土するなど形態的に変化することなく存続する。

4.重量と規模

鍤である以上、重量という要素は石錘のもう属性の中で最も重要な要素に他ならない⁹。各類型の石錘の重量を示したのが第210図である。打欠石錘は、50g前後から1,000gを越えるものまで幅広く存在するが、50gから200gのものが圧倒的に多い。米子市目久美遺跡では、200gから400gのものがかなり多く他遺跡のものと比べると大型のものが目立つ。切目石錘は25g前後から150g前後のものまで出土している。有溝石錘A類とB類はほぼ重量幅を共にし、10g程度のものから150g前後のものまで存在する。切目石錘と有溝石錘の重量幅もほぼ同じであるが、有溝石錘には10g～20gの超小型のものが存在する点で異なる。有溝石錘C類は250gから450gの範囲に存在するが、1,500g程度の超大型のものも井手脇遺跡、日久美遺跡で出土している。有溝石錘D類は400gから700gの範囲で捉えることができる。ここで注目されるのはC類とD類は重量幅を異にする点である。またA・B類とC・D類間の重量には大きな隔たりが認められる。

5.地理的分布と環境

県内における石錘出土遺跡の分布を概観すると、まず、東部では湖山第2遺跡、布勢第1・2遺跡、桂見遺跡など湖山池東南岸の低湿地に集中的に分布がみられる(第211図)。内陸部ではほとんどみられず、管見では千代川上流の市瀬小若荷谷遺跡で出土しているのみである。中部では、石脇第1遺跡、寺戸第2遺跡、池ノ谷第2遺跡など比較的起伏に富む海岸沿いと天神川から加勢蛇川にかけての内陸丘陵上に分布が集中している。井岡地頭遺跡も丘陵上に立地している。西部では米子市目久美遺跡、陰田第1・7・9遺跡など中海東岸の低湿地と日野川の下流域から上流域にかけて広く分布していることがわかる。

6.まとめ

以上のことから鳥取県内の石錘を整理すると、①縄文時代の有溝石錘はA・I類のみで列島において後期中葉に出現する有溝石錘B・I類は弥生時代以降出現すること、②北陸との共通性が窺われる切目石錘C類が少數ながらみられること、③弥生時代後期では青木遺跡出土のB・II類、またC・D類といった他地域に特徴的な形態が混在すること、④有溝石錘A・B類に孔を穿ったものはみられないこと、⑤重量について打欠石錘は幅広く、有溝石錘A・B類とC類、D類は重量に明確な相違がみられること、⑥立地は低湿地や扇状地のみならず内陸部丘陵上の遺跡でも出土すること、⑦比較的起伏に富む海岸の内湾に面する地域での出土例が多いことが特徴として挙げられる。これらの特徴から想定される各石錘の具体的な用途、この地域における漁業活動の復原については今後の課題としたい。それには石錘が機能を果たさうるに必要な数量の検討、出土遺構の検討、他の漁具との共伴関係とともに動物遺存体などからの捕獲対象魚の検討や民俗学的アプローチも必要となるだろう。また、他地域との交流や石材の生産流通の問題¹⁰などにも今後迫っていきたい。

(坂本 嘉和)

【註】

- 1) 青谷上寺地遺跡では短軸にシャープな溝を1条施したもののがみられるが、A類の範疇で捉えたい。
- 2) 羽合町南若ヒジ遺跡、羽村寺戸第2遺跡で古墳時代前期の堅穴住居から出土している。
- 3) しかし、実測図のみならず重量をはじめとするデータから記載していない報告書がしばしばみうけられる。今後は、詳細な報告がなされることを期待したい。
- 4) 井岡地頭遺跡で出土した有溝石錘は材質に砂質千枚岩が使用されていた。千枚岩は県中部ではみられず、県西部の日野川上流域や県東部の千代川上流域でしか採取できない石材であり(赤木三郎氏ご教承)、通商地から運ばれてきたことが想定できる。

【参考文献】

- 大野左季 1991 「漁撈」古墳時代の研究4 生産と流通 I P128～144
 下條信行 1984 「弥生・古墳時代の九州型石錘について」『九州文化史研究会紀要』第29号
 下條信行 1989 「弥生時代の世界漁港人の動向」『生産と流通の考古学』横山浩一先生追憶記念集 I
 山本直人 1983 「刀貫における縄文時代の網漁について」『北陸の考古学』石川考古学会会誌 第26号
 山本直人 1988 「北陸の漁業遺跡」雄山閣
 渡辺誠 1973 「縄文時代の漁業」雄山閣
 和田清吉 1985 「土錘・石錘」「弥生文化の研究」5 遺跡と技術 I P137～143
 和田啓吾 1988 「漁拓」「弥生文化の研究」2 生業 P153～161

第4節 井岡地中ソネ遺跡土壙墓群について

本節では、井岡地中ソネ遺跡で確認された土壙墓群についてまとめ、その性格と問題点について若干の私見を述べたいと思う。

1. 土壙墓群の概要

井岡地中ソネ遺跡では、A区北側において、土壙墓9基 (SX2~9・SK15)、上器棺墓1基 (SX1) 及び、上壙墓群に付随する、あるいは小型の土壙墓である可能性が考えられる土坑2基 (SK24・28) が、区画溝であるSD35・36とともに検出された (第128図)。当初この上面には、多量の土器と川原石がいくつか群をなして出土しており、土器溜まりとしていたものであるが、各土器溜まりの直下より土壙墓が検出されたことにより、これらは供獻土器及び標石であると認識したものである。各土器の詳細は第4章に譲るが、SX3~8・SK15・SK28と、ほぼすべての土壙墓の直上より各々供獻土器が出土している。特にSX3・5・SK15からは大型の壺が出土しているが、3基とも中心主体であるSX4に比して小型であり、他の土壙墓と比べて階層的序列関係が推定されるような状況ではなかった。総じてこの土壙墓群から出土した供獻土器は、土壙墓間で質的な格差は見出し難い、と評価できる。また、SX5上からは、土器・標石とともに赤化した焼土も検出されており、注意される (註)。

この土壙墓群は、2本の溝に区画された中心に位置する最も大型のSX4を中心として、その周間に土壙墓を築くことによって形成されたと推察されるものである。また、検出された土壙墓のすべてが主軸を等高線に平行する、N-65°~W前後にとっており、小口幅から推定される埋葬頭位はすべて北西方向である。この状況は、これらの土壙墓がすべて同じ意識の元に埋葬されたものであることを示すものであると判断できる。

盛土については、溝によって区画された内部からも、その痕跡は認められなかった。

これらの土壙墓群の形成された時期としては、供獻土器がすべて同一型式内で収まるものであり、土壙墓群は土器の型式差として現れない程の短期間に形成されたものと思われる。これらの供獻土器は若干古い要素を残すものの、おむね布留式最古段階併行期である天神川編年I様式期にあたると考えられる。

A区南側で検出された堅穴建物跡に、当該期のものは確認できなかったため、住居域と墓域との関係は不明である。しかし、第4章でも述べたように、A区南側包含層中からはこの時期にあたる土器片も出土しており、調査対象区域の更に南側、集落の中心部の存在が想定される場所に土壙墓群と同時期の堅穴建物が検出される可能性は高いものと思われる。また、標石と考えられる川原石の中には、SX8上面に置かれていたS11 (第143図) やSK15周辺で出土した第213図に示したもののように、作業台や石皿として使用されたと考えられる痕の認められるものがあった。A区南側に広がる住居址群からの転用と考えられ興味深い例である。

3. 東伯耆地域での類例 (第212図)

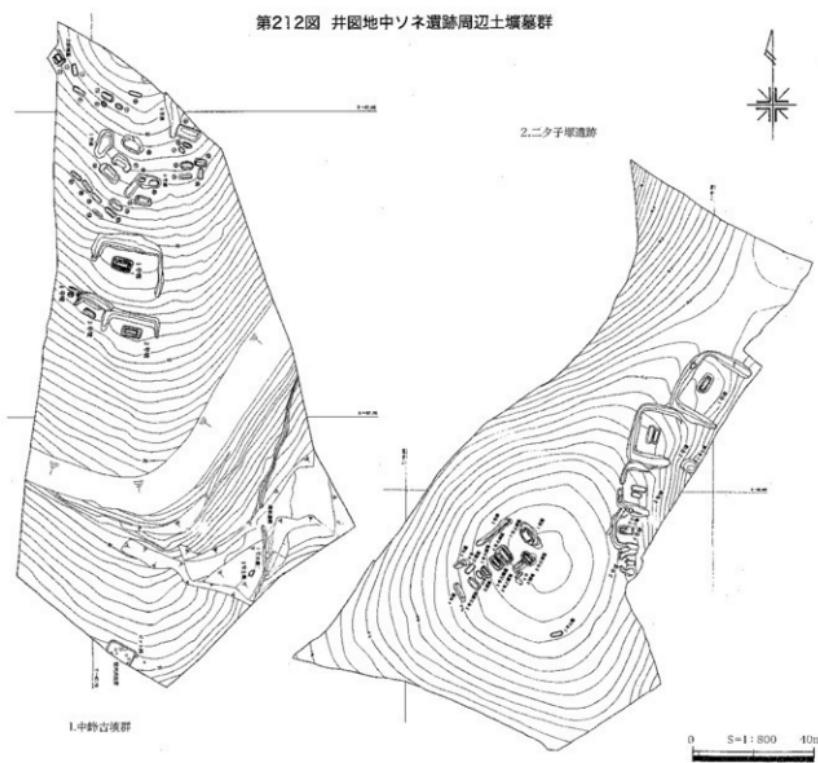
次に、近接地での類例を見てみる。

近接地で当該期の土壙墓群について、良好な類例となる遺跡として、倉吉市中峰土壙墓群 (倉吉市教育委員会1998)、おなじく二ヶ塚遺跡土壙墓群 (河1995) が挙げられる。ともに丘陵頂部に立地し、溝によって区画された墓域内に多数の土壙墓を配置している。さらに土壙墓群が立地する同一丘陵上、土壙墓群より低位に方墳群が確認されている点も同じで、弥生墳丘墓 (土壙墓群) から古墳への過渡的状況を示す好例として知られる遺跡である。

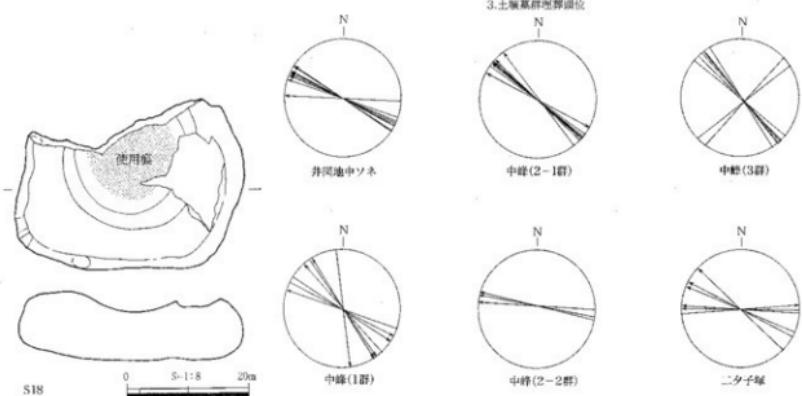
中峰土壙墓群は、報文中において、4つの小群に分けられており、調査担当者はこれら土壙墓群および古墳の変遷を、出土土器と切り合いで関係から、I群→2・1群→3群→2・2群→1号墳→2号墳→3号墳→4号墳としている。このなかで、L字状の区画溝をもち、一墳一墓である2~2群を、弥生七墳墓から1号墳以降の古墳への過渡的要素をもった土壙墓であると評価している。

これらの想定されている埋葬頭位は、1群でややばらつきがみられるものの、ほぼ北西頭位をとるものである。これらの主軸については、ほぼ1・2~1群:N-50~60°~W、2~2群・1~4号墳:N-75°~W前後、3群中12~15号土壙墓:N-85°~W前後で、等高線に平行に造られている。この中で3群中の9~11号土壙墓は、

第212図 井団地中ソネ遺跡周辺土壤墓群



3.土壤墓群埋葬調査



第213図 SK15付近出土石器

S18 0 S-1:8 20m

主軸が等高線に平行ではなく斜行するようにN-85°-W前後となっており、3群はさらに細分できる可能性がある。

これらの想定される時期としては、出土遺物から土井編年（土井1986）で土壙墓群が上種第5遺跡貯藏穴7号・住居址27号期～宮ノ下遺跡4・6号住居址期、古墳群は1号墳が宮ノ下遺跡4・6号住居址期（天神川編年I期併行）にあたるとしている。

二タ子塚遺跡土壙墓群は、10基の土壙墓が3方を囲む区画溝内につくられており、さらに同じ丘陵上、土壙墓群より低位に方墳が5基造られていた。

土壙墓の主軸は6・8・9号土壙墓以外N-45°-W前後で、等高線に平行に、整然と配置されている。

時期としては出土遺物から、土壙墓群が土井編年上種第5貯藏穴7号期から郷塚第2号貯藏穴期（庄内併行期）の範囲に収まり、方墳群の上限は宮ノ下遺跡4・6号住居址期としている。

3. 小結

井戸地中ソネ遺跡土壙墓群も含め、このような特徴を持つ土壙墓群は、研究者によって呼称はまちまちであるが、「墳丘墓」・「台状墓」あるいは「区画墓」とされているものの範疇に入るものである（谷口2002）。

上にみた倉吉市の2遺跡をみてわかるように、当地域で天神川編年I期（宮ノ下遺跡4・6号住居址期）は、土壙墓群（墳丘墓）から古墳への変容期にあたり、当該期のなかに収まると考えられる井戸地中ソネ遺跡土壙墓群は、墳丘墓の最終段階にあたるものと評価できる。

また、これら3つの土壙墓群は、多くは主軸を北西-南東方向にとっており、強い共通性が見出せる。これらはほぼ主軸を等高線と平行になるように築かれており、この主軸の共通性は墓域の立地に大きく左右される問題である。しかし、中峰古墳群内土壙墓群3群中の9～11号土壙墓のように、地形（等高線）に関わりなく主軸を北西方向にとり、他の土壙墓にあわせている一群もみられる。立地の選定も含め、そこに何らかの意識が働いた可能性を考えるべきであろう。埋葬頭位も推定可能なものに関しては、中峰古墳群の1群はややばらついた傾向がみられるが、ほぼ北西側であるという傾向が認められる。この傾向は、すべて同一の意識のもとに土壙墓群が形成された可能性を示唆しているのではないだろうか。ちなみに、西伯耆地域に所在する妻木晚田遺跡では、北東-南西方向に主軸をとる傾向が認められる（大山町教育委員会2000）ようであり、今後検討されるべき課題であると考える。

さらに、土壙墓上で出土した供獻土器に関しては、それぞれの器種構成に差が認められるものの、そこに格差が認められるようなものではなかった。この状況は、井戸地中ソネ遺跡土壙墓群内で、土壙墓の大小の差に関わらず、等質的な墓上儀礼が執り行われていたことを示すのではないだろうか。

以上、供獻土器が良好な状態で出土した井戸地中ソネ遺跡土壙墓群は、山陰地方の弥生墳丘墓から古墳が築造されるまでに至る過程を考える上で、重要な位置を占める例になることは確実であろう。筆者の力量不足から、問題点の羅列に終わってしまったが、この土壙墓群の正確な歴史的評価をくだすためには、今回挙げた問題点に加えて更に多くの問題を検討しなければならないだろう。

（大野 哲二）

第104表 SK15付近出土石器観察表

No.	遺跡・地区	井戸	PL	種類	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
S19	SK15付近	第213号		石皿	中央窪み内側底が認められる。	36.9	27.1	10.3	1460	安山岩	1/3欠損

【註】墓上で火を伴う儀礼を行った痕跡の認められる例として、埋土中、炭化物を多く含む層中に供獻土器が出土している鳥取市柱塚1号墓がある。（鳥取県教育委員会1984）

（主要参考文献）

- 鳥取県教育委員会 1984 「桂貝墳墓群」
- 倉吉市教育委員会 1997 「中峰古墳群発掘調査報告書」
- 倉吉市教育委員会 1995 「夕子塚遺跡発掘調査報告書」
- 松井 達 1999 「因縁・伯耆・出土の墓」『季刊考古学』第67号
- 大山町教育委員会 2000 「妻木晚田遺跡発掘調査報告書Ⅰ～IV」
- 土井珠美 1986 「鳥取県下の状況」「弥生時代後期から古墳時代初期のいわゆる山陰系土器について」第18回理財文化財研究会事務局
- 谷口恭子 2002 「因縁の弥生墳墓」「台状墓の世界」両丹考古研ほか

第5節 井図地中ソネ遺跡の堅穴建物について

1 はじめに

堅穴建物の変遷研究に関しては、鳥取県内でも多くの地域でその変遷過程が提示されている。本節では、当遺跡を含め東伯町内の遺跡において、弥生時代後期後葉における堅穴建物がどのような規模と平面形態を持つのか、西伯耆の状況と比較し、変遷過程の中でどういった位置付けであるかを考える。また、屋内施設である中央ピットと当該時期に多く検出される床溝についても若干の考察を加える。

2 井図地中ソネ遺跡と東伯町内遺跡の堅穴建物について

井図地中ソネ遺跡においては、標高64～66mの台地上で弥生時代後期後葉から終末にかけて計13棟の堅穴建物を検出した。同時期の東伯町内の遺跡からは、水溜り・駕籠据場遺跡計21棟、森藤第1遺跡計6棟、大峰遺跡計18棟の資料を使用する。各堅穴建物の計測表と規模別平面プランは第105表の通りである。各遺跡概ね20～30m内の床面積をもつ堅穴建物が多く、平面プランでは円形・隅丸方形・多角形が見られる。特にこの規模をもつ堅穴建物に多角形（隅丸五角形）が集中して採用されている傾向にある。それ以外では20m以下では円形・隅丸方形が多く、30m以上では円形が採用されている（大峰遺跡では方形プランをもつものが検出されている）。

出土遺物から見てみると、扇状地性台地に位置する水溜り・駕籠据場遺跡では、土玉など漁労具と考えられている遺物の出土が目立っており、これは他遺跡より海岸に近く、集落の人々が海を利用する機会に恵まれていたことを示していると考えられる。その他、当遺跡で検出したSI4で、大量の土器が床面上でほぼ完形に近い形で出土した。規模は6m以上（面積の半分が調査区外にかかり、推定12m前後と思われる。）で、平面プランは梢円形を呈する。他の遺跡を見てみると、ほぼ同規模の床面積を持つ堅穴建物は、水溜り・駕籠据場遺跡（SI8・SI11・SI18）、森藤第1遺跡（SI03・SI04）、大峰遺跡（SI03・SI09・SI21）であるが、どの堅穴内でも床面積の割に土器の出土が大量であると報告されており、しかも完形に近い土器も含まれている（大峰遺跡のSI03に関しては砾石と数点の土器のみ出土している。ただこの遺構は焼失住居と報告され、遺物は持ち出されたとも解釈できる）。このように床面積のみが小規模で、土器が集中して遺存している堅穴建物が各遺跡内で散在見られることから、建物の性格について集落内での使用法になんらかの共通性があるのかもしれない。以上が、当遺跡と周辺遺跡の堅穴建物の傾向である。

3 床溝について

床溝とは、堅穴建物の床面に設けられる浅く細い溝状遺構のことである。その機能においては、基本的に排水施設と考えられ、室内空間を分割する間仕切り痕跡である⁽¹⁾という解釈もある。本論では、形態のみから検討を進めていく。床溝は西日本で弥生時代中期後葉から後期にかけて見られる。床溝の形態分類（第214図）は、A類からE類までは中央ピットとなんらかの関連が考えられるもの、F類は支柱との関わりを持つもの、G類は古墳時代以降見られるもので、壁溝から直線的に伸び支柱に向かうものや、壁際で寄ったピット（特殊ピット）を囲うように掘られているもの、H類は中央ピットや支柱、屋内土坑のどれとも関連がなく単独で位置するものとしたが、削平により途切れている状況と考えられ、本来の形状を失っている可能性が高いものとして分類した。各遺跡の床溝保有率は、当遺跡では13棟中10棟で77%、水溜り・駕籠据場遺跡で21棟中17棟で81%、森藤第1遺跡で6棟中3棟で50%、大峰遺跡で18棟中6棟で33%という結果になった。比率に関しては各遺跡によって差があるが、それは調査状況によるものとも考えられる。今回集成した中では、A・B類が主流で、CからF類までは少数であった。また、以下に床溝と中央ピットの形態を分類した。

床面積の規模を<①30m以上><②30m以下15m以上><③15m以下>とする。中央ピット分類—<Ⅰ>二段掘りもしくは一部に段を持つもの<Ⅱ>ピット内に段を持つないもの<Ⅲ>ピット上位周囲に土堤を伴いピット内に段を持つもの<Ⅳ>土堤を伴うがピット内に段を持たないもの

井図地中ソネ遺跡 <①>B I · C I · E I · F II <②>B I · C I · III · D III <③>A I · B I · H I

水溜り・駕籠据場遺跡 <①> A III・B I・III <②> A I・III・IV・B I・III・IV・C I・H III <③> A I・B III

森藤第1・2遺跡 <②> C I・II・H I・II

大峰遺跡 <①> A II・B I <②> A II・B I・II

以上の結果から、当該時期においては、中央ピットと連結しているものが大半であるが、ピット内に段をもつものや土堤の有無に左右されていないことが分かる。床溝は基本的に直線的に伸びる形態と、「く」の字状を呈するものや二股に分かれるものなどがある（第215図）。

4 西伯耆においての状況

鳥取県西部に位置する青木遺跡（米子市）と比較検討してみる。弥生時代後期後葉（青木編年III期）における堅穴建物計41棟中、床面積20m²以下は計17棟で平面プランは円形・隅丸方形・隅丸五角形、20~30m²内は計14棟で円形・隅丸方形・隅丸六角形、30m²以上は10棟で円形・隅丸方形・隅丸六角形が検出されている。東伯町内の遺跡と比べると、限定された床面積のみでなく、規模に関わらず多角形住居の採用に積極的であることが認められる。また、円形堅穴建物に関しては床面積の拡大に伴って主柱本数が増加しているが、多角形堅穴建物に関しては、床面積が拡大しても主柱本数は変化していない。そうなると、主柱間の距離の克服が課題となってくるわけであるが、実際その値にはばらつきが目立つ。ただ、30m²以上の床面積をもつ多角形堅穴建物で、主柱間距離の最大・最小値の差がそれほど開かなくなる傾向が見られ、なんらかの解決法があるのかもしれない。ただ、全時期・全地域を通して言えるものであるかは分からぬ。その他、床面積が小規模で土器の出土が大量である堅穴建物などは見られなかった。次に、同時期の床溝を持つ堅穴建物は、以下のようである。

青木遺跡（青木編年III期）<①> A I・B I・III <②> A II・B I・II・C I・II

（青木編年IV期）<②> A II・B II・C II

青木遺跡の床溝保有率は、弥生時代後期後半において49棟中9棟で18%、古墳時代前期において12棟中6棟で50%であった。それ以降になると、G類にあたる床溝が見られる。青木遺跡でもA・B類が主流ではC類が見られるのみであった。しかし棟数の割合から考えると床溝の附設されている割合は東伯町内遺跡より低い傾向になり、中央ピットとの組み合わせにも多様性は見られなかった。

3 まとめ

井岡地帯ソネ遺跡は、建物の規模・平面プラン構成に関して、周辺遺跡との比較において矛盾は見られなかつた。そして、床面積が小規模な堅穴建物についても同じような傾向が見られたが、それを「地域性」ととらかはまだ早計であろう。青木遺跡との比較においては、多角形プランをもつ堅穴建物の採用においてちがいが見られるようだが、これは構造上の克服が青木遺跡では解決されたことによるものと推測している。周内施設においては、壁溝・中央ピット（土堤の有無に関わらず）は普遍的に附設されている。床溝については、形状と附設率にやや差が見られた。床溝が見られない建物に関して言えば、堅穴という構造上屋内に排水・温氣抜きなどの機能を備える必要性がある。しかし、床面に溝状施設がなくても、その代替となるもので克服できると推測され、床溝の有無がその機能の有無に必ずしもつながるとは言えないのではないだろうか。近年、中央ピットは水溜の可能性が指摘されている⁽²⁾が、普遍的な事象であるかは研究が待たれるところであり、床溝が中央ピットに伴い普及したものである⁽³⁾という説についても然りである。いずれにしろ、床溝の性格についてはいま不明であり今後も検討を重ねていかねばならない。また、今後は地域を拡大し伯耆地方の堅穴建物の変遷を明確にするとともに建物の性格についても検討していくことを考える。

（岩井 美枝）

<註記・参考文献>

(1) 石野博信1975「二住居床面の利用法」「日本古代文化の探求・家」社会思想社。

(2) 浅川道男2001「第8章 弥生高地性集落の廻穴住居―山陰地方の3つの事例から―」『堅穴住居の空間分析に関する復元研究』奈良国立文化財研究所。

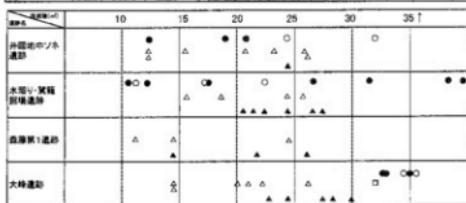
(3) 宮木長二郎1990「ベッド状遺構と屋内施設」「季刊考古学」第32号・雄山閣、1996「第4節 溝状遺構」『日本原始古代の住居建築』中央公論社

<報告書>

『水溜り・駕籠据場、森藤第3遺跡調査報告書』1988、『森藤第1・森藤第2遺跡駕籠据場調査報告書』1987、『大峰遺跡先削調査報告書』1988（以上、鳥取県東伯郡教育委員会より）『青木遺跡発掘調査報告書』1976-1977-1978鳥取県教育委員会

第105表 堅穴建物測定表及び平面プラン規格別表

遺跡名	No.	標高(m)	地 形	平面形	規範 面積(m ²)	面積 (m ²)	柱 数	共軸距離 (平均m)	柱間距 離の差 (m)	中央ピット	床溝	床溝	土器以外 遺物	考
水原里・葉園遺跡	S11	49.3	畠地	不整円	4.21/4.19	15.1	4	2.5	-	I		A		
水原里・葉園遺跡	S13	47.7	畠地	円	4.79/4.31	16.95	5	2.75/1.9	0.85	II	B(1)	A		
水原里・葉園遺跡	S14	47.4	畠地	円	5.26/5.41	22.51	5	2.72/2.4	0.34	IV	B(1)	A		
水原里・葉園遺跡	S15	46.6	畠地	扇丘六角	5.51/5.27	22.51	5	2.72/2.45	0.22	II	B(1)	A	鉄器	
水原里・葉園遺跡	S16	47.1	畠地	扇丘六角	5.37/5.03	21.7	5	2.72/2.67	0.22	II	H(2)	A	鉄器品・土玉	
水原里・葉園遺跡	S17	47.1	畠地	扇丘六角	5.46/5.04	24.21	4	3.33/3.34	0.2	II	A(1)	A	土玉	
水原里・葉園遺跡	S18	46.7	畠地	円	3.68/3.59	10.7	4	2.31/1.98	0.23	I	A(1)	A	土玉	
水原里・葉園遺跡	S19	47.5	畠地	扇丘六角	5.29/5.25	23.02	5	2.75/2.45	0.3	II	C(1)	A	土玉	
水原里・葉園遺跡	S20	47.2	畠地	扇丘六角	5.46/5.25	23.02	5	2.75/2.45	0.35	I	C(3)	A	鉄器	
水原里・葉園遺跡	S21	47.2	畠地	扇丘六角	5.29/5.25	23.02	5	2.75/2.45	0.35	I	D(1)	A	土玉	
水原里・葉園遺跡	S22	46.5	畠地	不整円	7.50/5.98	18.86	6	3.52/2.56	0.95	II	B(2)	A	土玉・礫石	
水原里・葉園遺跡	S23	46.5	畠地	不整円	6.69/6.54	20.81	6	2.72/2.49	0.28	I	B(1)	A	土玉・礫石	複数件の可能性あり
水原里・葉園遺跡	S24	46.5	畠地	扇丘六角	5.85/5.83	26.51	5	3.15/2.52	0.63	IV	A(1)	A	ヤリガンナ	
水原里・葉園遺跡	S25	47.1	畠地	扇丘六角	6.44/5.17	21.8	5	2.85/2.39	0.5	I	B(2)	A		
水原里・葉園遺跡	S27	47.7	畠地	不整円	6.22/5.50	26.48	5	2.85/2.25	0.6	II	A(1)	A	土玉	
水原里・葉園遺跡	S18	47.6	畠地	扇丘六角	5.35/5.30	19.3	4	3.25/2.28	0.37	II	B(3)	A	鉄片	
水原里・葉園遺跡	S19	46.5	畠地	扇丘六角	5.41/5.21	26.02	5	2.85/2.58	0.37	II	A(1)	A	土玉・礫石	
水原里・葉園遺跡	S20	41.2	畠地	扇丘六角	6.26/5.46	26.9	5	3.47/2.95	0.52	II	A(1)	A	土玉・礫石	
水原里・葉園遺跡	S21	44.3	畠地	扇丘六角	6.83/7.52	55.9	8	2.85/2.46	0.34	III	B(1)	A	土玉	
水原里・葉園遺跡	S22	44.3	畠地	扇丘六角	6.26/5.46	26.9	5	3.47/2.95	0.52	II	B(1)	A	土玉・礫石	
水原里・葉園遺跡	S23	44.3	畠地	扇丘六角	6.24/4.18	18.86	4	2.89/2.22	0.68	II	B(1) H(2)	A	土玉・礫石	
水原里・葉園遺跡	S24	45.1	畠地	扇丘六角	6.09/6.02	24.4	5	2.88/2.47	0.41	II	H(1)	A	ヤリガンナ	
水原里・葉園遺跡	S25	42.7	畠地	扇丘六角	5.27/4.83	14.02	5	2.47	-	I	C(1)	A	扇石	
水原里・葉園遺跡	S26	33.76	河岸	五角	3.97/3.69	12.75	4	2.62/2.41	0.2	II	C(1) H(2)	A	鉄製品・土玉	
水原里・葉園遺跡	S14	133.06	河岸	扇丸	3.97/3.89	12.75	4	2.62/2.41	0.2	II	H(2)	A	扇石	
森野第1遺跡	S15	159.44	丘陵	扇丸	5.69/5.25	25.78	5	2.9	-	I				
森野第1遺跡	S16	129.16	丘陵	扇丸	4.22/4.08	14.52	4	2.24	-	I				
森野第1遺跡	S17	128.42	丘陵	扇丸	5.77/5.57	24.88	5	2.98	-	I				
森野第1遺跡	S19	126.46	丘陵	扇丸	5.73/5.34	22.13	5	2.77	-	I				
大崩	S01	136.3	丘陵	扇丸	7.35/5.9	35.5	4	3.5/2.8	0.7	II	A(1) H(2)	A		
人頭	S02	137.5	丘陵	五角	6.22/5.81	30	5	3.3/2.5	0.6	II	A	A		
大崩	S03	138.8	丘陵	扇丸	5.16/4.16	14	4	3.0/2.5	0.5	II	A	S104を切る		
人頭	S04	138.4	丘陵	扇丸	6.44/5.28	24.6	5	3.2/2.5	0.7	II	A	S104より古		
大崩	S05	138.6	丘陵	扇丸	6.8/5.2	27	5	2.8/3.0	0.2	I	A			
大崩	S06	138.5	丘陵	扇丸	5.61/5.35	21	4	3.1/2.7	0.4	I	B(2)	A	ジッパーを模すように直線的な床溝	
人頭	S07	138.6	丘陵	扇丸	5.2/5.15	22.5	4	3.4/2.5	0.9	II	B(1)	A	ジッパーを模すように直線的な床溝	
大崩	S09	142.2	丘陵	扇丸	4.39/4.31	14	4	2.6/2.5	0.1	II	A(2) H(1)	A		
大崩	S10	140.5	丘陵	扇丸	5.35/5.47	20	4	3.2/2.4	0.8	II	A	P 6.1は補助柱か		
人頭	S11	141.4	丘陵	五角	6.22/5.42	31	4	3.3/2.5	0.6	A	A	P 6.4・7は補助柱か		
大崩	S12	143.5	丘陵	不整円	6.04/5.67	25	5	2.9/2.44	0.76	II	A			
人頭	S13	143.8	丘陵	五角	6.14/5.16	20	5	3.5/2.59	0.25	I	B(1)	A	補助柱と區わるピットあり	
人頭	S15	142.5	丘陵	五角	7.69/5.70	34	5	3.2/2.44	0.77	II	A	鉄製品 振築後		
人頭	S16	142.8	丘陵	不整	7.45/5.88	32	5	3.1/2.66	1.05	I	A			
人頭	S17	143.1	丘陵	不整	7.49/7.18	35	5	3.38/2.46	0.58	II	A			
人頭	S18	140.8	丘陵	円	7.49/7.18	35	6	2.88/2.49	0.58	I	B(1)	A		
人頭	S19	141.3	丘陵	不整	7.48/7.63	33	6	4.0/3.9	1	II	A			
人頭	S21	141.3	丘陵	扇丸	3.18/3.09	6	4	1.98/1.79	0.28	II	A			



※ ○円形 ●不整円形 △方形 ▲扇丸六角形 ▲多角形

* 逆位No.衣記および計測は各報告書による

* 柱間距離の差は、柱間距離最大値 - 最小値

* 小央ピットに関しては、文中表記参照

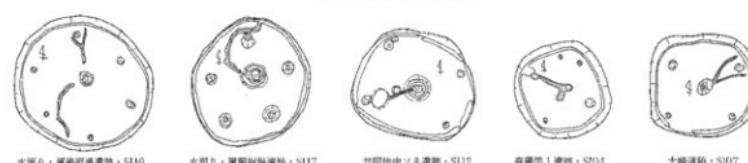
* 床溝に関しては下部分類図参照。○内数字は条数を表す

* 建消に関して A-3/4以上塗る B-1/2~3/4 C-1/2-k

曲 D-なし



第214図 床溝分類図



第215図 床溝を持つ堅穴建物 (S=1/250)・図は各報告書より転載、再トレス、一部改変あり)

第7章　まととめ

前章まで述べてきた両遺跡の調査成果について、本章で総括する。

井岡地頭遺跡では、縄文時代から中世初頭にいたる時期の遺構が検出された。縄文時代では、中期の土坑が確認され、石巒や石錘が出土した。科学的根拠は得られなかつたものの墓塚の可能性がある。また、時期の特定できなかつた落とし穴状土坑も多くの縄文時代のものと考えられる。遺物は、外来系の可能性がある前期羽状縄文系土器の他、中期の船元式土器がまとまって出土した。弥生時代では、溝状遺構から大型の石臼が出土し、当時の生業を知る手がかりとなった。遺物は前・中期の土器が出土している。古墳時代では、前期の堅穴建物跡と土坑が各々基礎認された。ただし中・後期の遺構・遺物はほとんど無く、本遺跡の消長における空白期となる。本調査地に本格的な集落が成立したのは7世紀代であり、堅穴建物跡、溝状遺構、土坑などの遺構と大量の土器が出土した。特に7世紀後半の堅穴建物跡は近隣での調査例が少なく、重要な資料となった。中世初頭には、溝により「コ」字形に開まれた方形区画が營まれる。その性格については確言できないが、眺望のきく立地を志向した館跡の可能性がある。もしそうならば、全国的に見ても古い例となり注目される。

井岡地頭ソネ遺跡では、縄文時代および弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺構が確認された。最も古い時期のものとして、縄文時代中期の落とし穴状土坑が確認されており、井岡地頭遺跡と同様に主に狩猟の場として利用されていたものと考えられる。その後、弥生時代中期にいたるまでの遺構・遺物は確認されておらず、調査地周辺の利用はしばらく途絶えていたものと推察される。

弥生時代後期には集落が形成されており、A区南側に堅穴建物跡が多く検出された。調査で検出したのは集落の北端部と考えられ、その中心は南側の調査区外に存在するものと考えられる。その内容としては、焼失堅穴建物跡であるS19をはじめとして、堅穴建物跡や貯蔵穴と考えられる袋状土坑など、遺存状況の比較的良好な遺構・遺物が検出された。

弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけては、A区北側に土壙墓群が形成されており、多量の供獻土器が出土した。したがってこの時期は墓域として利用されていたことが確認できるが、堅穴建物跡は検出されていない。しかし、南側の調査区外に当該期の集落が存在する可能性があり、北側に墓域が形成されたため、意図的に居住域が離された可能性も考えられよう。墓域と居住域との位置関係は、今後も注意されるべき問題点である。

その後、墓域としての認識が無くなったためか、古墳時代中期の堅穴建物跡が調査区南側で検出されており、再び集落が北側に拡大されている状況が確認できた。また、この時期の遺構として、炭化米を多量に含む土坑4基が検出された。この土坑の性格は明らかではないが、出土した炭化米について形態特性分析およびDNA分析を行った結果、当時の稻作技術やその伝播経路を研究する上で貴重な資料となることが判明した。

両遺跡は小谷を隔てて隣りあう丘陵上に立地するが、遺跡の消長をたどると、それぞれが盛行の時期を違えている点が注意される。縄文時代から弥生時代中期にかけては、両遺跡とも主に狩猟採集の場として利用されていたが、集落の様相は明らかではない。弥生時代後期、古墳時代中期には井岡地頭ソネ遺跡に集落が展開するが、井岡地頭遺跡では当該期の遺構・遺物は確認されていない。古墳時代後期以降、井岡地頭ソネ遺跡では土地利用の痕跡が途絶えるが、井岡地頭遺跡では7世紀代に集落が成立する。このような動向には、丘陵縁に立地し見晴らしのよい井岡地頭遺跡と、谷をひとつ隔てて奥まった位置にある井岡地中ソネ遺跡との立地の違いが大きく関係しているよう。時期ごと、あるいは遺跡の性格ごとによる土地利用のあり方を考えるうえで、興味深い成果を得ることができた。

限られた期間内での調査・整理であったため、調査者自身が調査成果を未だ充分に咀嚼できていない状況である。調査地周辺では、今後も国道9号改築に伴う多くの発掘調査が予定されており、資料の増加が期待される。これら周辺遺跡との関係についても目を向けながら、引き続き検討を進めていくことを考える。

(君嶋・大野・岩井・坂本)

写真図版
PLATE



1. 遺跡周辺の地形（北から）



2. 遺跡周辺の地形（南から）



1. 井団地頭遺跡調査前全景（北西から）



2. 井団地中ソネ遺跡調査前全景（北西から）



1. SD 4 (北東から)



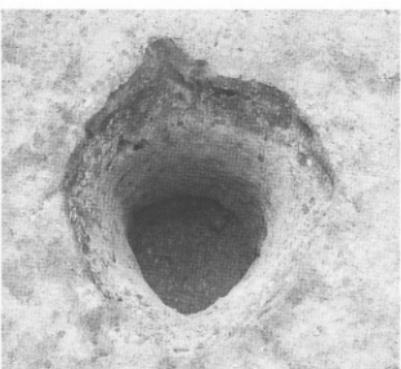
2. SD 4 遺物出土状況①
(北西から)



3. SD 4 遺物出土状況②
(北西から)



1. SK17 (南から)



2. SK25 (北から)



3. SK28・34 (北東から)



4. SK32 (東から)



5. SK33 (北東から)



6. SK33遺物出土状況 (西から)



1. B区黒褐色土堆積状況（南東から）



2. B区第1遺構面（黒褐色土）検出状況（南西から）



1. 方形区画 (SD 8) ①
(北西から)



2. 方形区画 (SD 8) ②
(北東から)



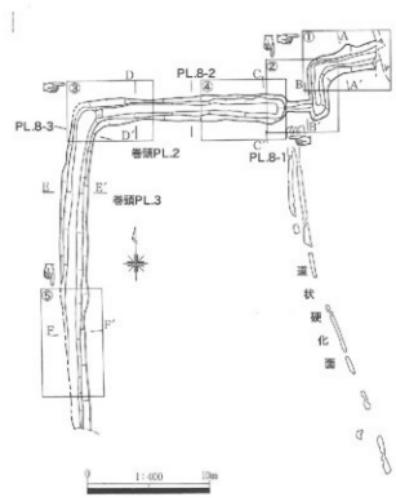
3. 方形区画 (SD 8) ③
(西から)



1. 方形区画 (SD8) ④
(東から)



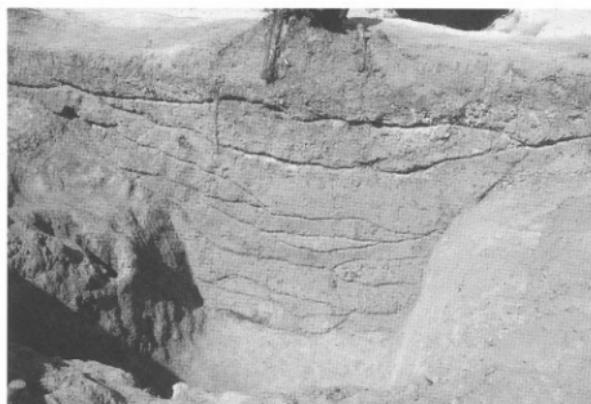
2. 方形区画 (SD10) ⑤ 碓出土状況
(北から)



方形区画 PL配置図



3. 道状硬化面 (北から)



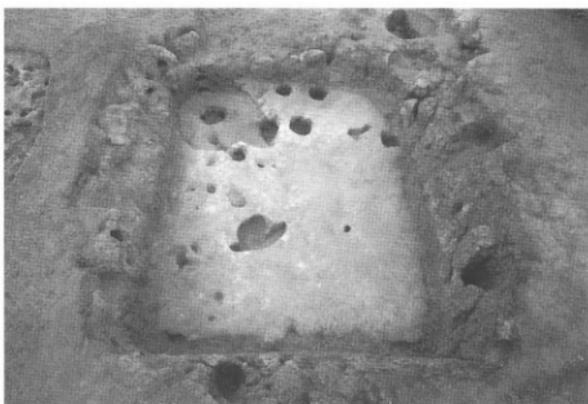
1. 方形区画 (SD8)
土層断面① (東から)



2. 方形区画 (SD8)
土層断面② (西から)



3. 方形区画 (SD10)
土層断面 (南から)



1. SI 1 (南から)



2. SI 1 貼床除去後
完掘状況 (南から)



3. SI 1 遺物 (34)
出土状況 (南から)



1. SI2 (北から)



2. SI2 貼床除去後完掘状況（北から）



3. SI3 (東から)



1. SI 3 遺物 (40・45)
出土状況 (東から)



2. SI 4 (西から)



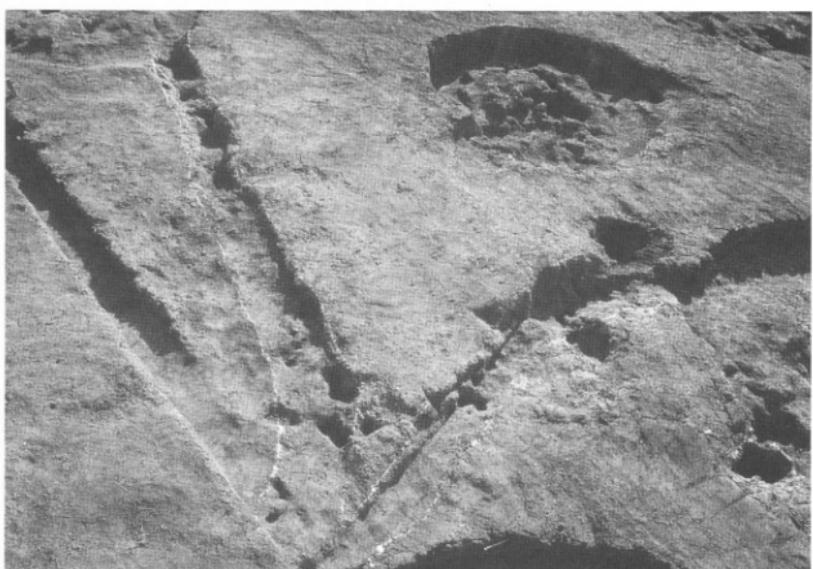
3. SI 4 遺物出土状況
(西から)



1. SD1 (南から)



2. SD2・3 (南から)



3. SD5・6 (北東から)



1. SD 7 (南から)



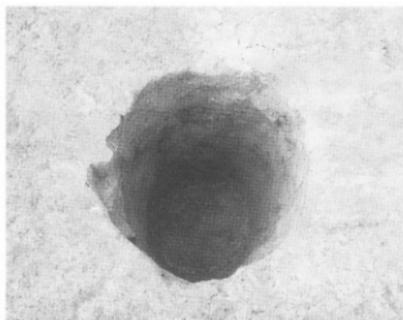
2. SD 9 (東から)



3. SD11・12 (北から)



4. SD13 (南から)



1. SK2 (南から)



2. SK3 (北から)



3. SK9 (南西から)



4. SK10 (南から)



5. SK4 (北西から)



6. SK5 (西から)



1. SK 1 (南西から)



2. SK 7 (東から)



3. SK 6 (北から)



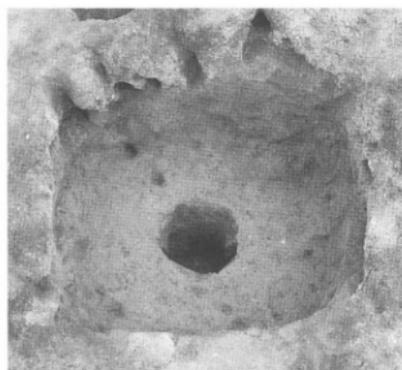
4. SK 8 (東から)



1. SK11 (南西から)



2. SK12 (北から)



3. SK13 (西から)



4. SK14 (南西から)



5. SK15 (北東から)



6. SK16 (西から)



1. SK18 (西から)



2. SK27 (東から)



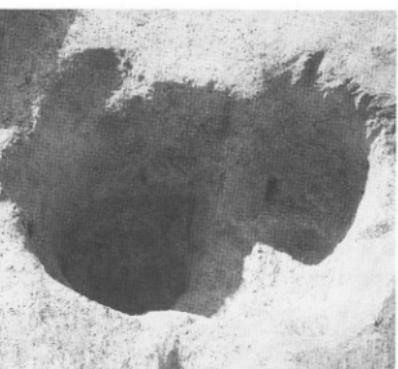
3. SK22 (西から)



4. SK23 (南から)



5. SK26 (南から)



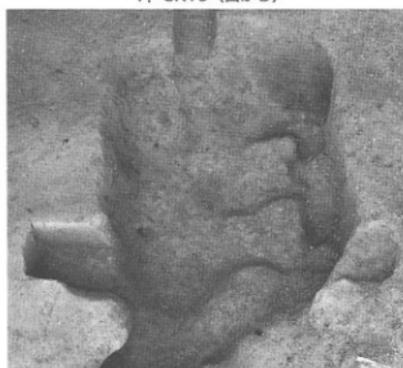
6. SK29・31 (北から)



1. SK19 (西から)



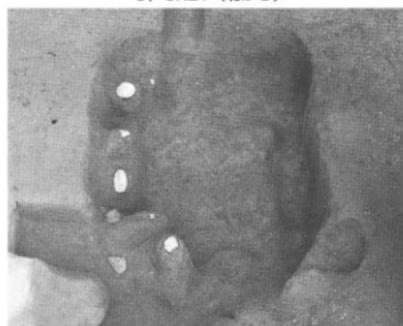
2. SK24・35 (東から)



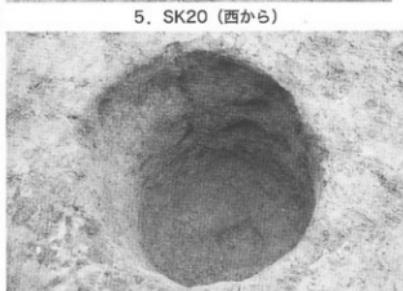
3. SK21 (北から)



5. SK20 (西から)



4. SK21遺物出土状況 (北から)



6. SK30 (北から)



1. A・B区完掘状況（上が北）



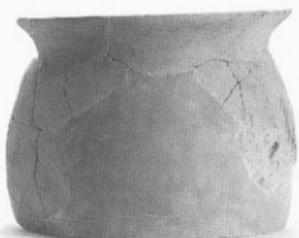
2. 方形区画完掘状況（上が北）



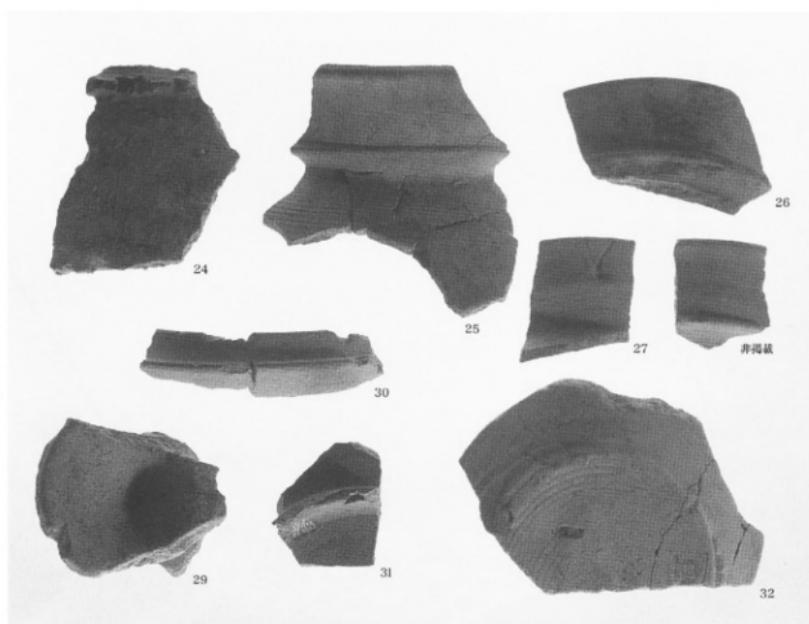
第1 遺構面出土遺物



1. SK33出土遺物



2. SD4出土遺物



1. 方形区画 (SD 8 + 10) 出土遺物



2. 方形区画 (SD 8) 出土遺物



3. SI 1 出土遺物



1. SI3出土遺物

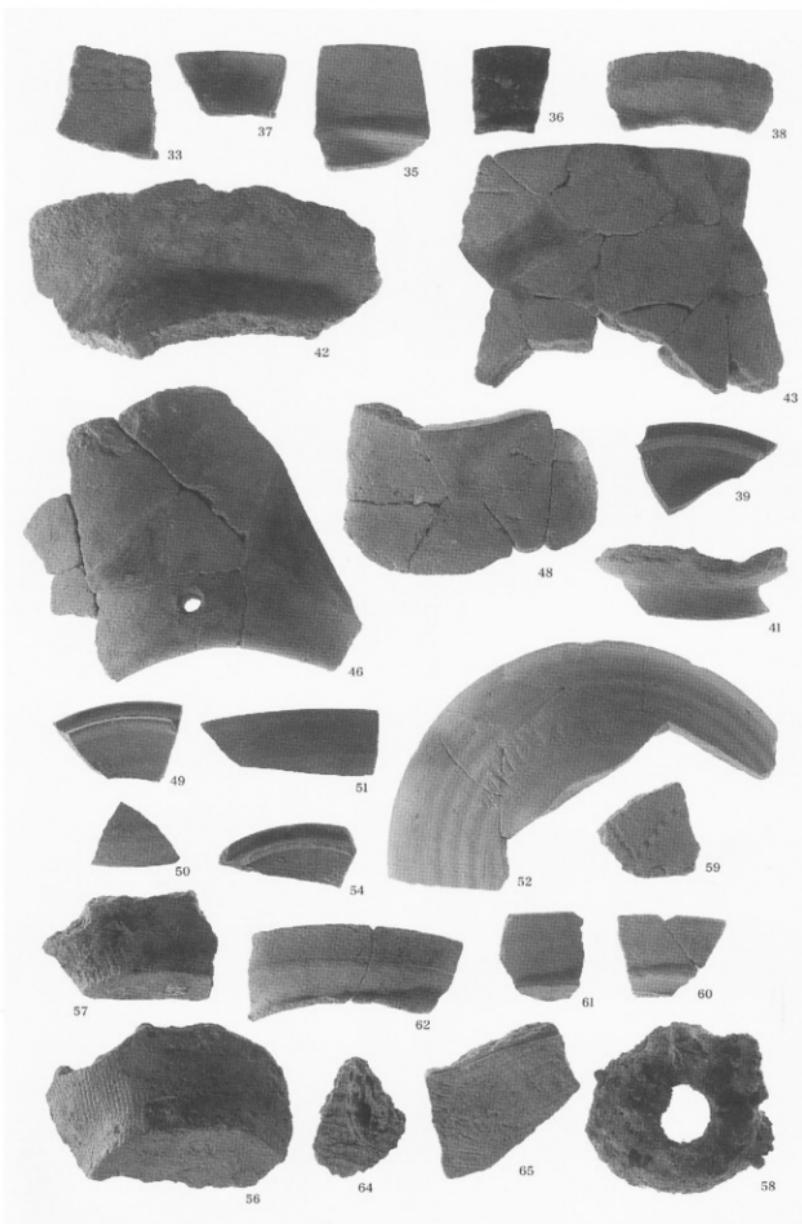


2. SD1出土遺物

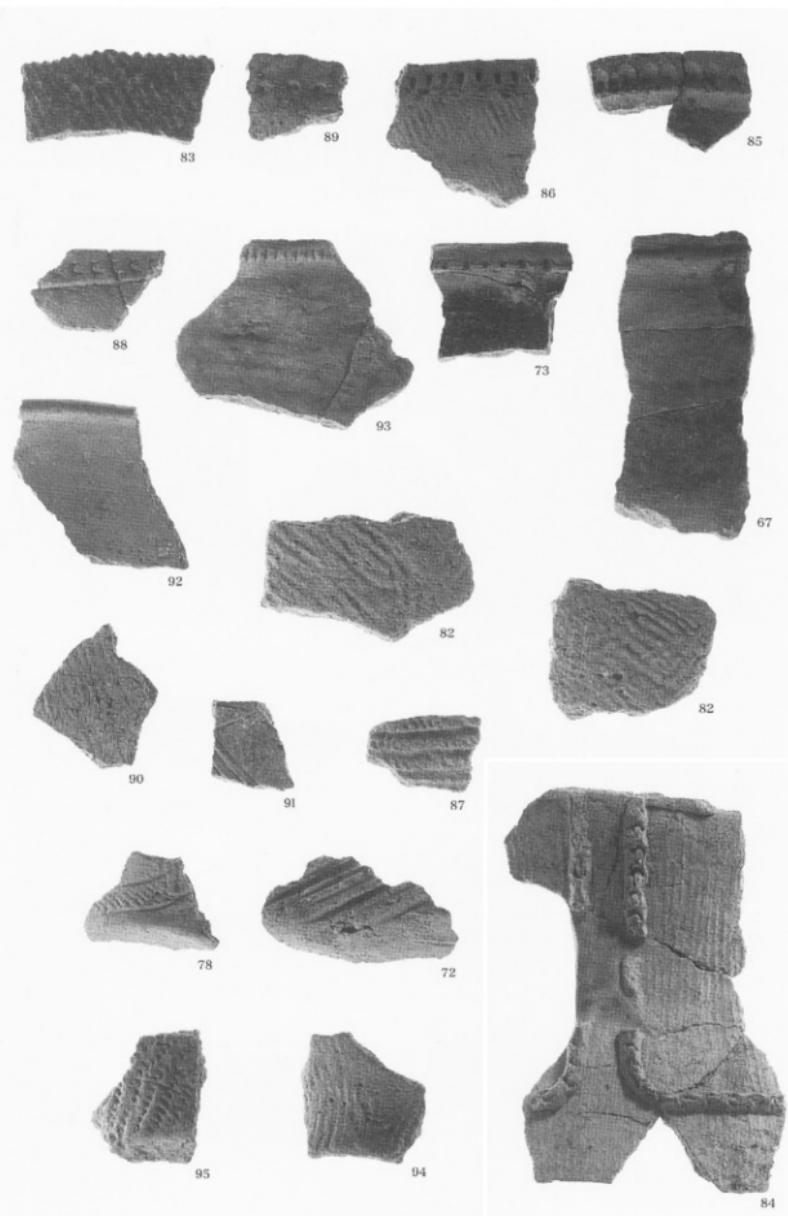


3. SK3出土遺物

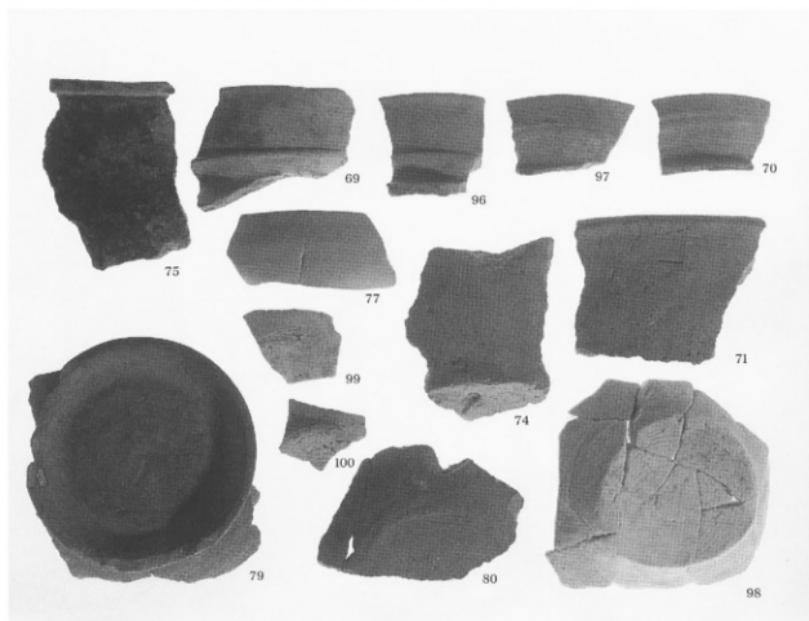
PL.24 井園地頭遺跡



SI・SK・SD出土遺物



包含層出土遺物（1）



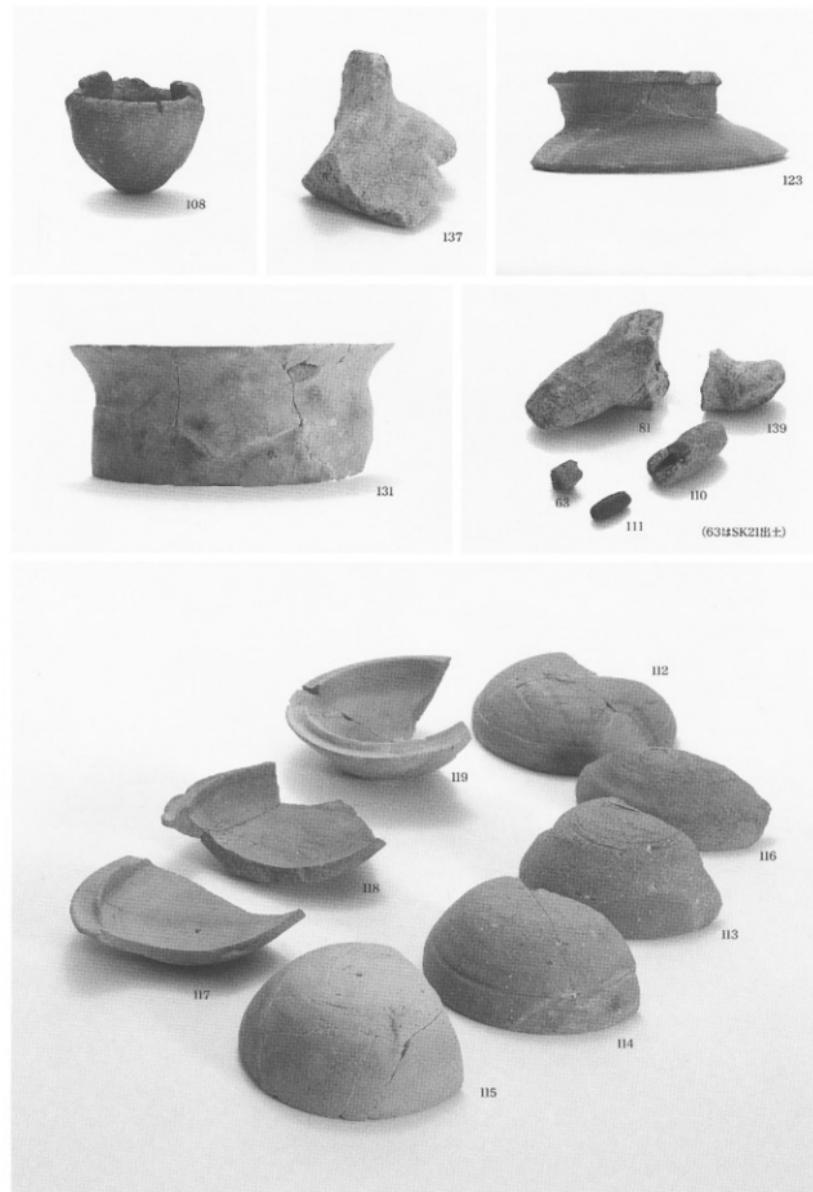
1. 包含層出土遺物（2）



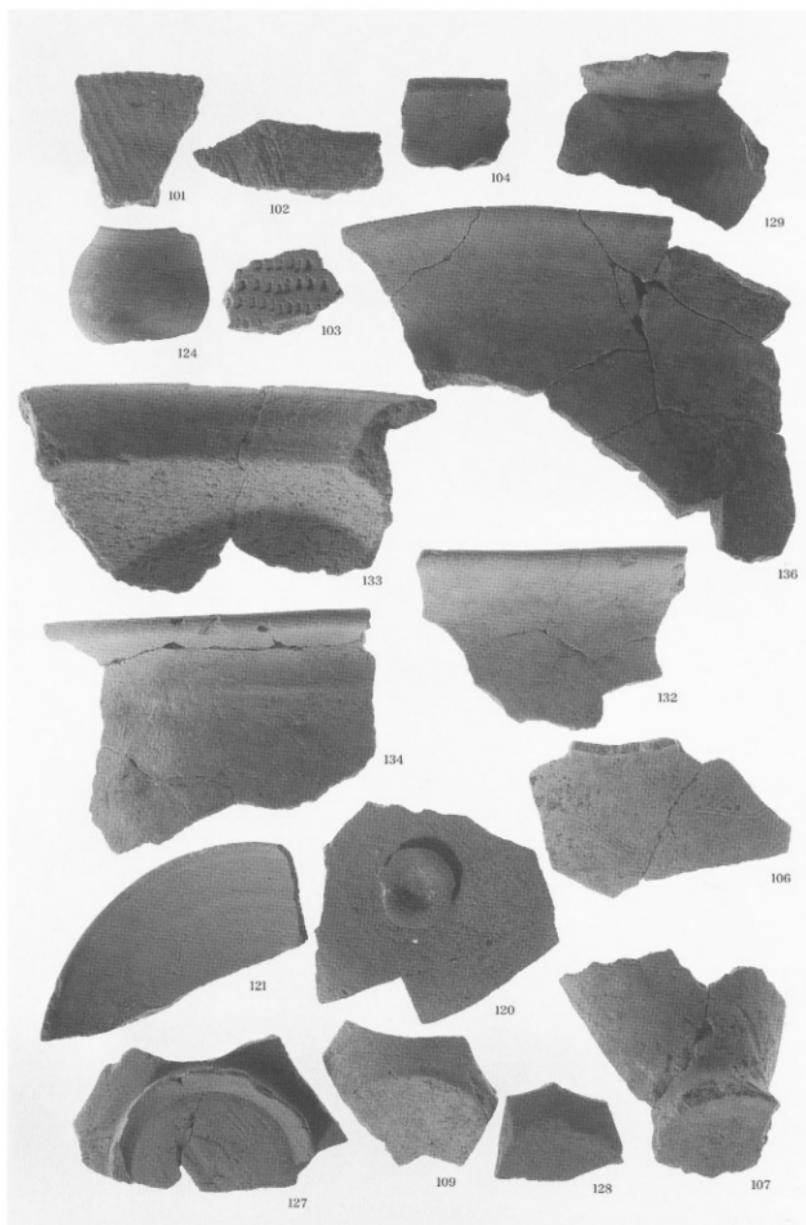
2. 包含層出土遺物（3）



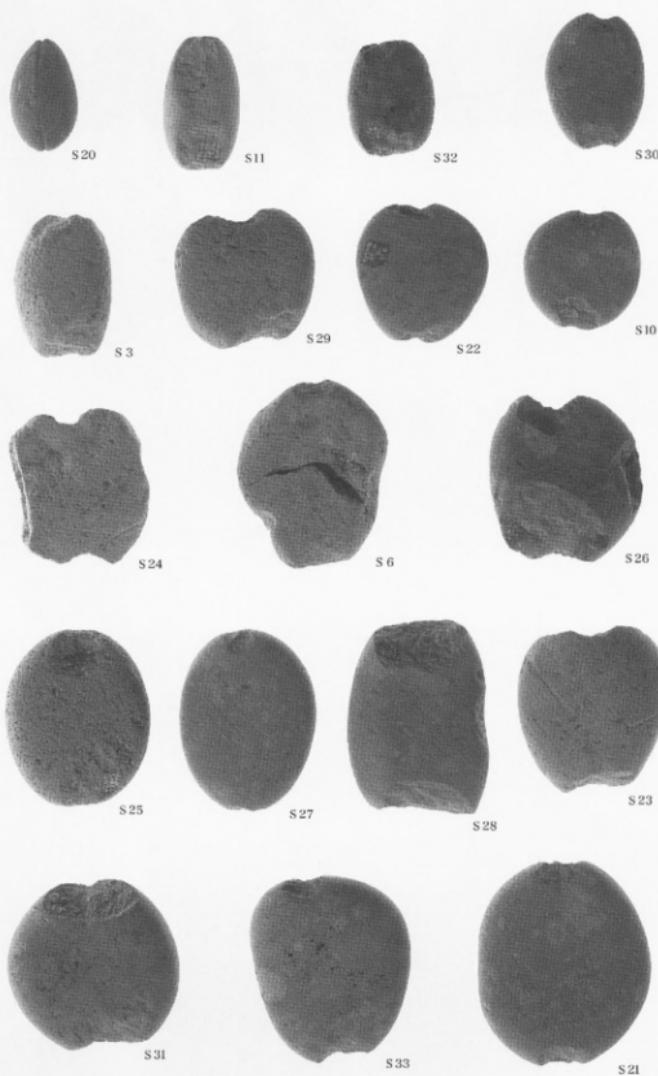
3. 表土・攢乱土出土遺物（1）



表土・捣乱土出土遺物（2）



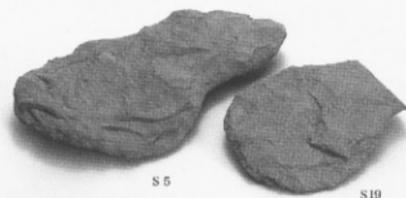
表土・攢乱土出土遺物（3）



石錐



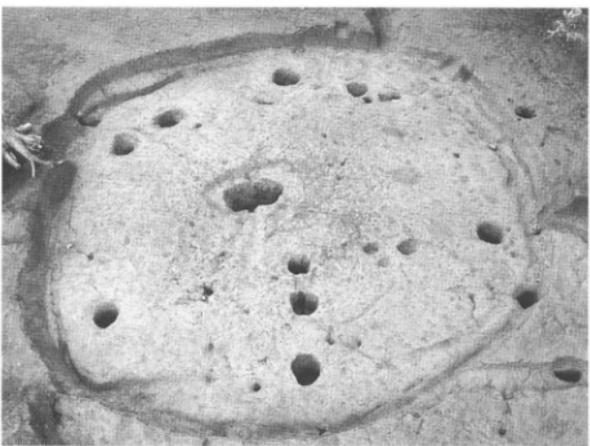
1. 石鋸・剥片石器



2. 石鋸



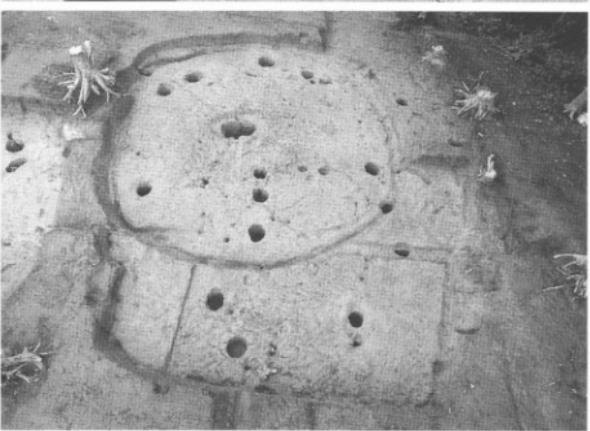
3. 碾石器・凹み石



1. SI1 (西から)



2. SI1 遺物出土状況
(南から)



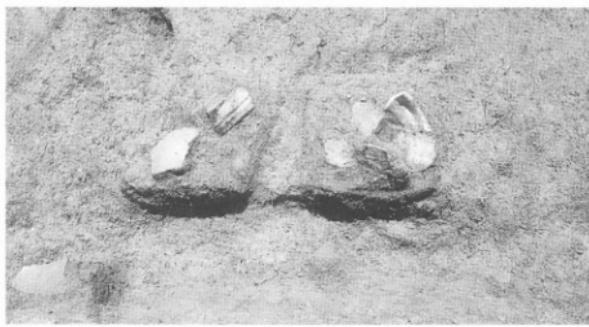
3. SI1・7 全景
(西から)



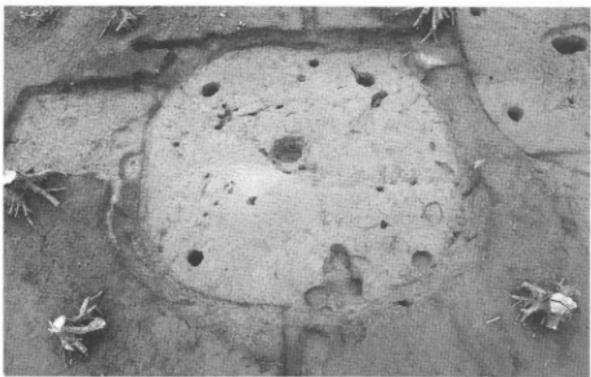
1. SI 7床面検出状況
(西から)



2. SI 7南西隅遺物出土
状況 (南から)



3. SI 7西壁付近遺物出
土状況 (西から)



1. SI2 (西から)



2. SI2 南西隅遺物出土
状況 (南から)



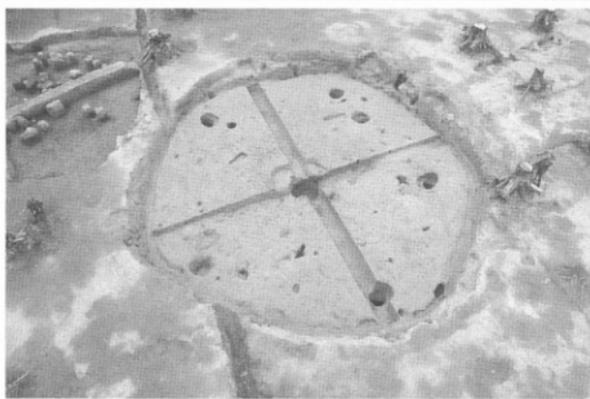
3. SI3・8・14
(北から)



1. SI4 (北から)



2. SI4 遺物出土状況
(北から)



3. SI5 (東から)



1. SI6 (東から)



2. SI6 遺物出土状況
(南から)



3. SI15 (北から)



1. SI9炭化材
(垂木)
出土状況
(東から)



2. SI9炭化材
No1・2
出土状況
(東から)

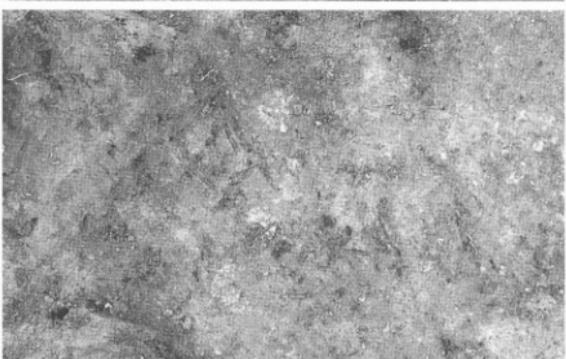


3. SI9炭化材
No67出土状況
(南から)

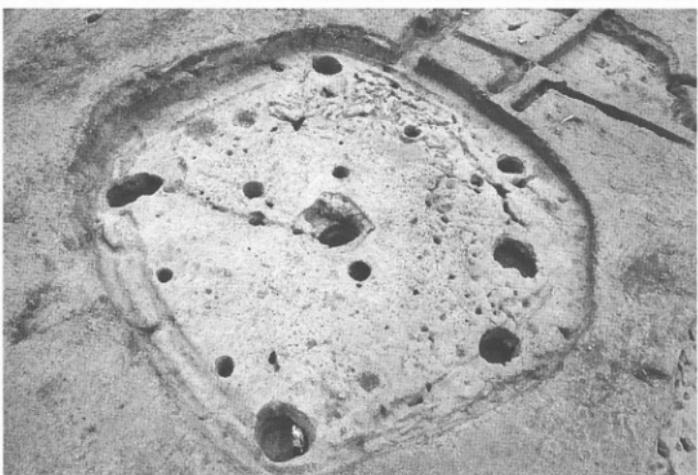
1. SI9 遺物出土状況
(東から)



2. SI9 茅材出土状況

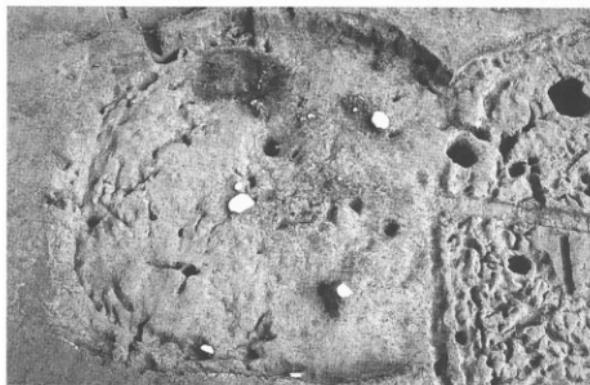


3. SI9 (南から)

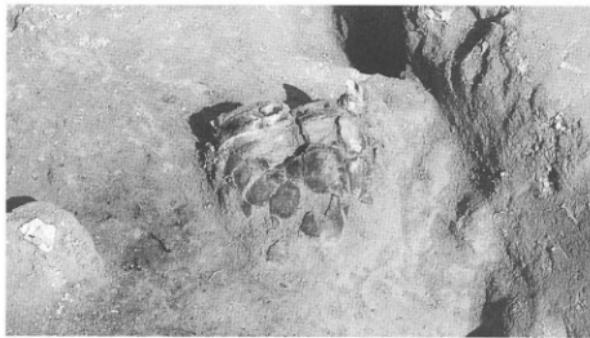




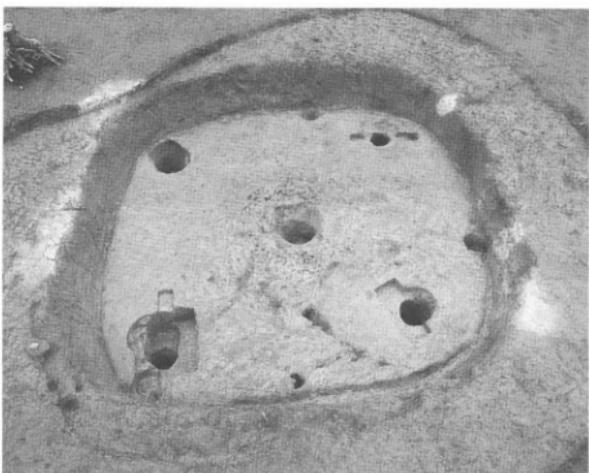
1. SI10 (西から)



2. SI10遺物出土状況
(西から)



3. SI10東壁遺物出土
状況 (南から)



1. SI11 (南から)



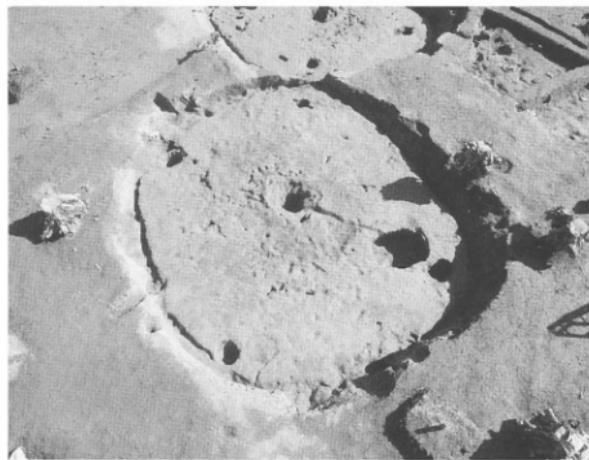
1. SI11遺物出土状況
(南西から)



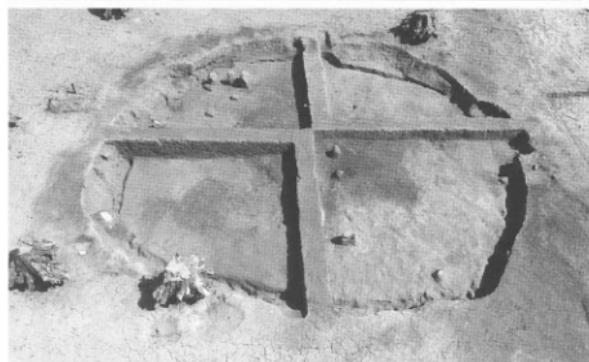
3. SI11ピット確認状況 (南から)



4. SI11中央ピット土層断面 (北から)



1. SI12 (北から)



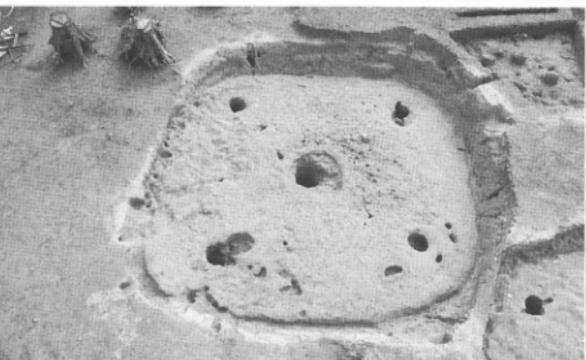
2. SI12床面炭混土
検出状況 (南から)



3. SI12内土坑遺物
出土状況 (北から)



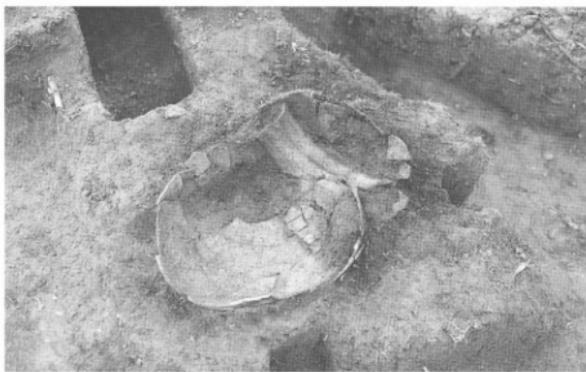
1. SI13 (西から)



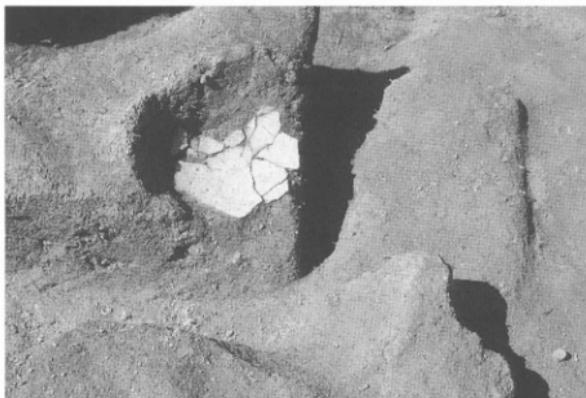
2. SI16 (北から)



3. SI17 (西から)



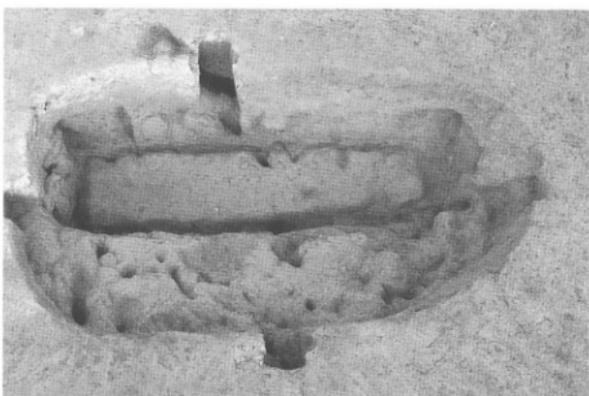
1. SX1 (東から)



2. SX1 蓋部出土状況
(南から)



3. SX1 堀方 (東から)



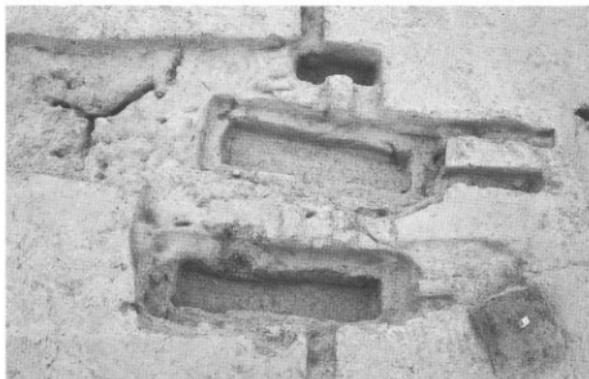
1. SX2 (南から)



2. SX3 (南から)



3. SX3土層断面
(西から)



1. SX3・5、SK28
(南から)



2. SX3・5、SK28
直上遺物出土状況
(南から)



3. SX3直上遺物出土状況（南から）



4. SK28直上遺物出土状況（北から）



1. SX4（南から）



2. SX4直上遺物出土状況（南から）



3. SX6直上遺物出土状況（北から）



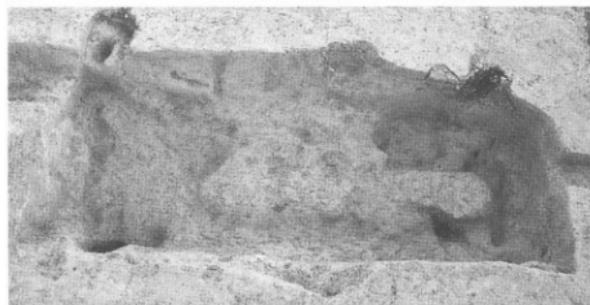
4. SX6、SK24
(南から)



1. SX 7 (北から)



2. SX 7 直上遺物出土
状況 (南から)



3. SX 8 (南から)



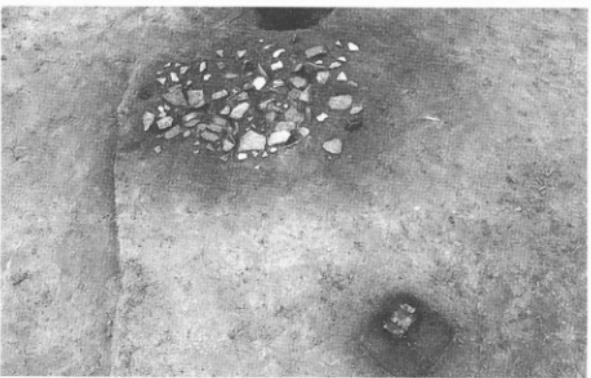
4. SX 8 直上遺物出土状況 (南から)



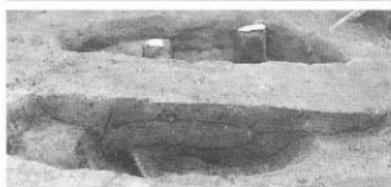
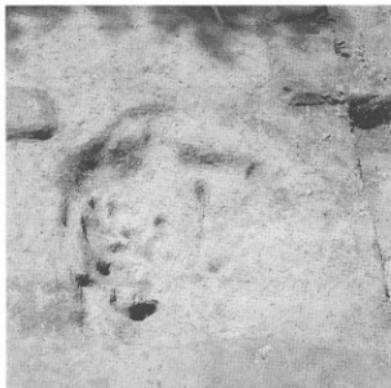
1. SX9 (北から)



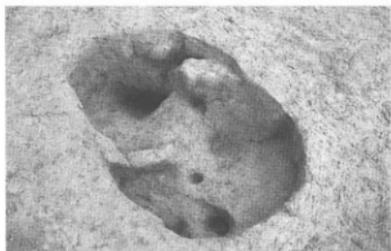
2. SK15 (東から)



3. SK15直上遺物出土
状況 (東から)



1. SK 1



2. SK 4

炭化米出土土坑



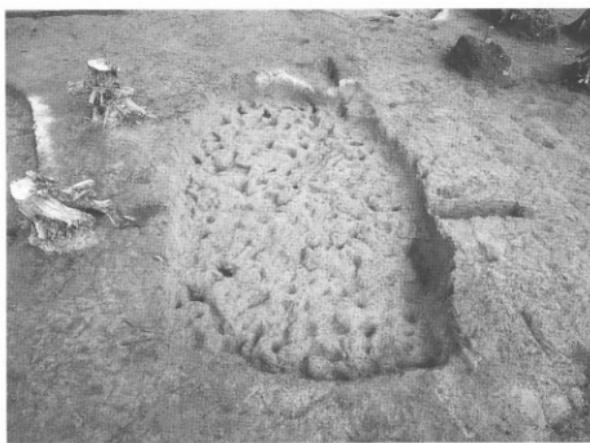
1. SK 3 (北から)



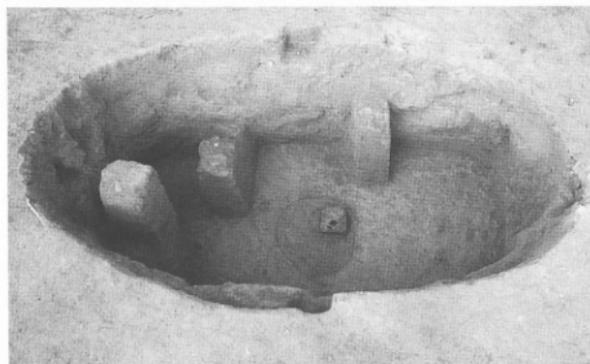
2. SK 6 (東から)



3. SK 7 (東から)



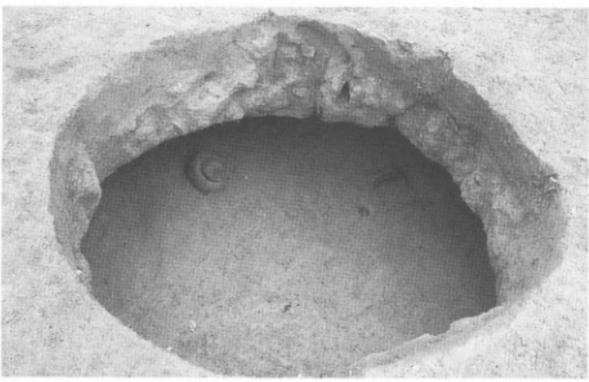
1. SK12 (南から)



2. SK14 (東から)



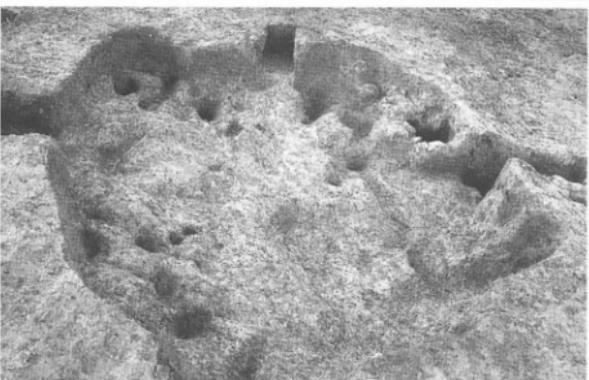
3. SK17 (東から)



1. SK18 (北東から)



2. SK26上砾群出土
状況 (南から)



3. SK26 (南から)

PL52 井図地中ソネ遺跡



1. SD1 (東から)



2. SD21 (西から)



3. SD22~29 (南から)



4. A区南側SD完掘状況
(北から)



1. A区竪穴建物跡群
(北から)



2. B区北側土層断面
(南から)



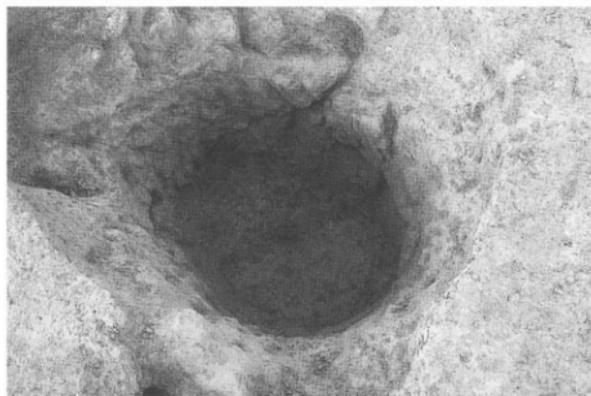
3. B区包含層遺物出土状況
(北から)



1. SI18 (北から)



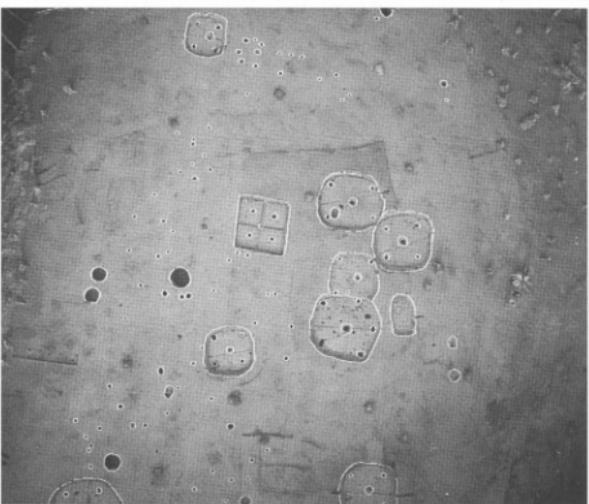
2. SI18遺物出土状況
(北から)



3. SK25 (南から)



1. 現地説明会風景



2. A区竪穴建物跡群
(上が北)



3. 調査後航空撮影
(南から)



1. 調査地全景（上が北）



2. 調査後航空撮影（東から）



5

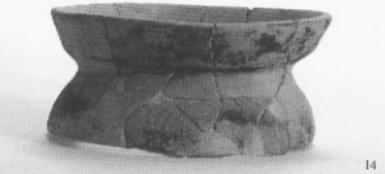
1. SI7出土土器



12



15



14



10



9



7

2. SI2出土土器



8



22

3. SI8出土土器



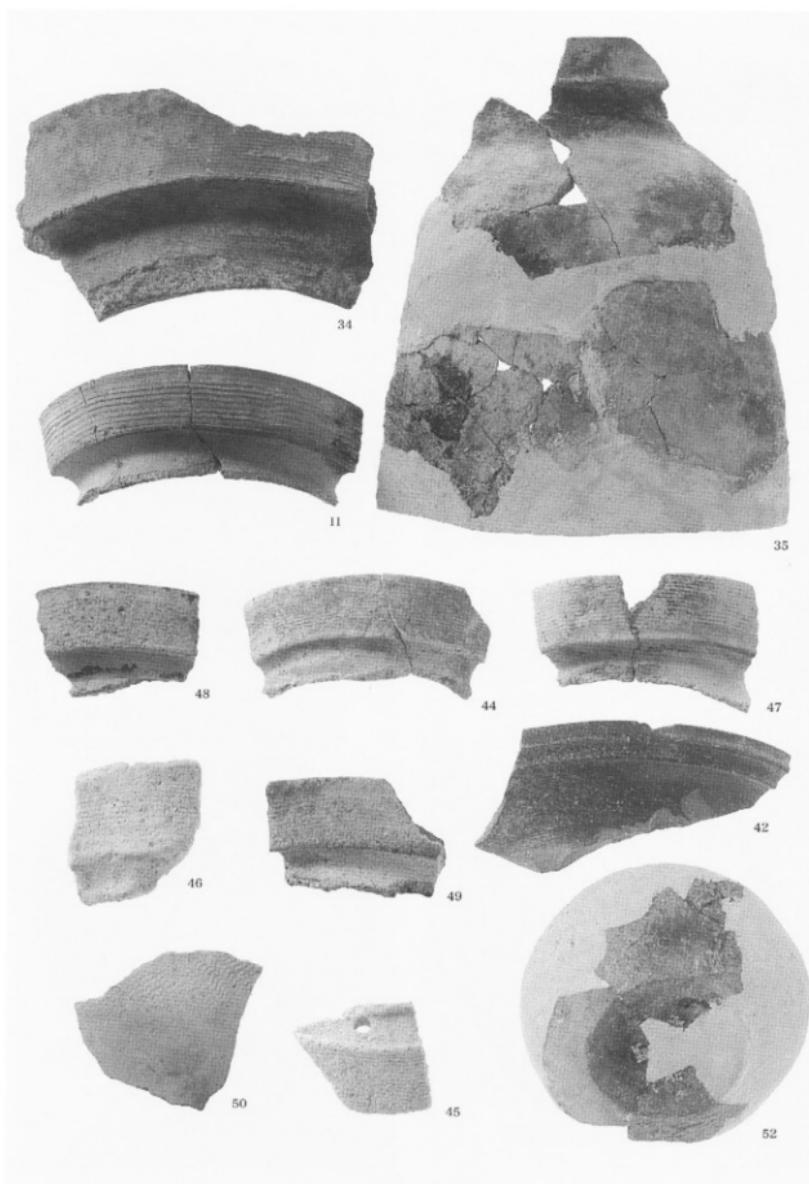
20



竪穴建物出土土器 (1) (SI1・2・4・7・8・14)



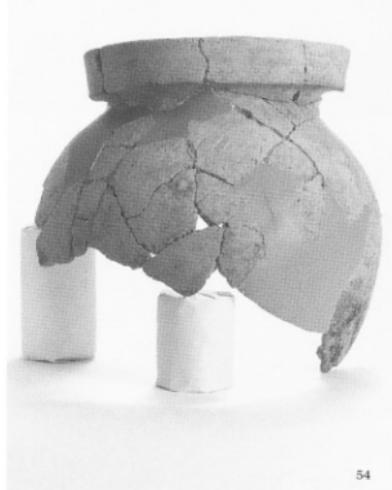
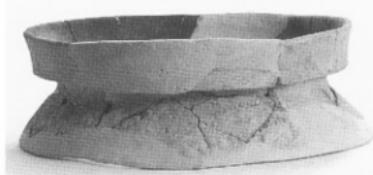
S14 出土土器



竪穴建物出土土器（2）(SI2・4・5)



1. SI5出土土器



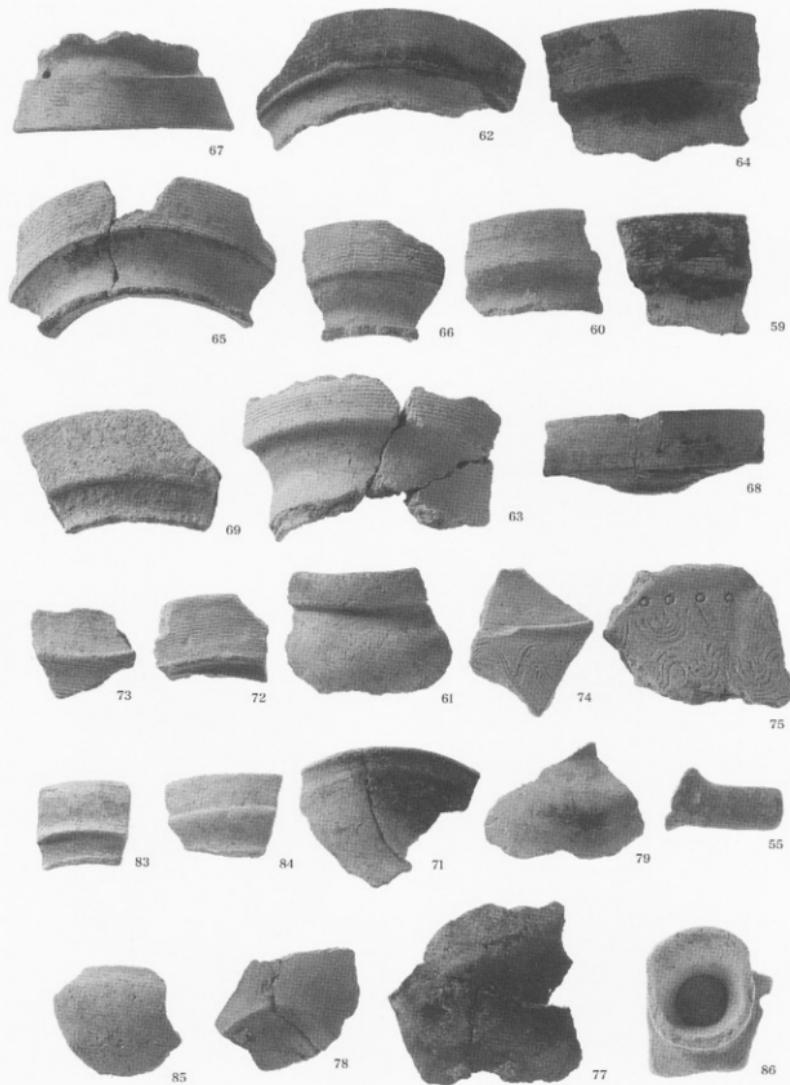
2. SI6出土土器 (1)



1. SI6出土土器 (2)



2. SI15出土土器



竪穴建物出土土器 (3) (SI 6・15)



89

1. SI9出土土器



93



94

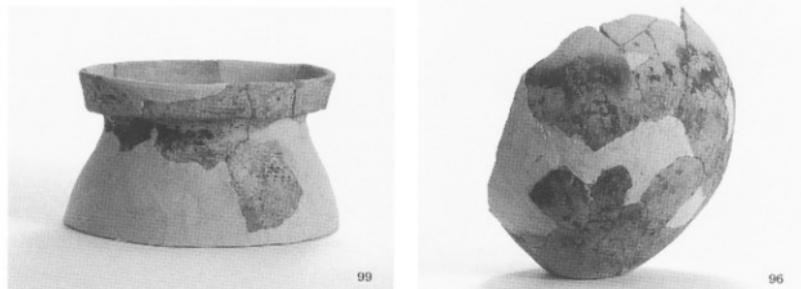
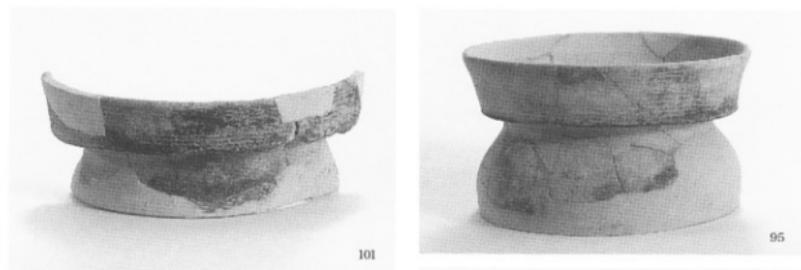


106

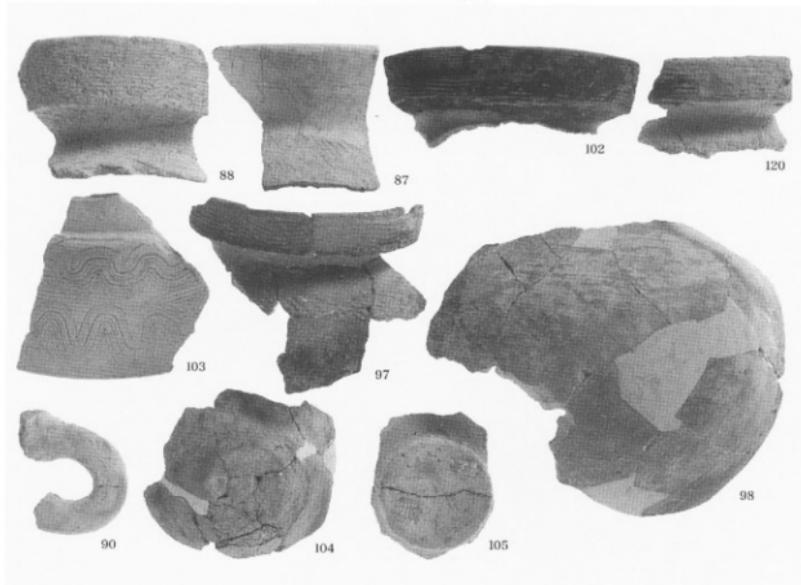


92

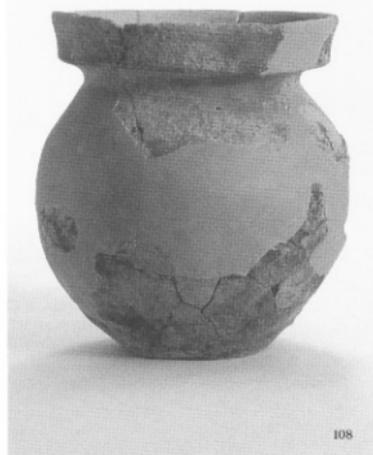
2. SI10出土土器 (1)



1. SI10出土土器 (2)



2. 積穴建物出土土器 (4) (SI9・10)



108



111



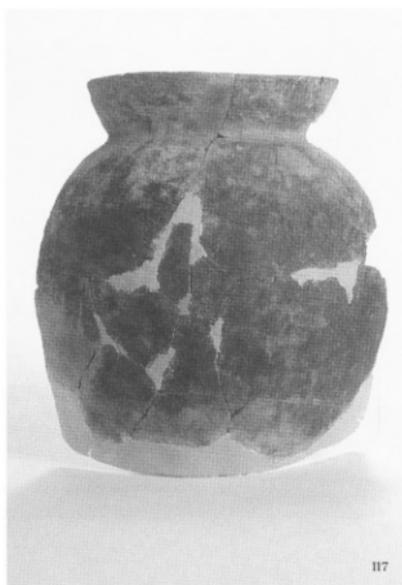
109

1. SI11出土土器



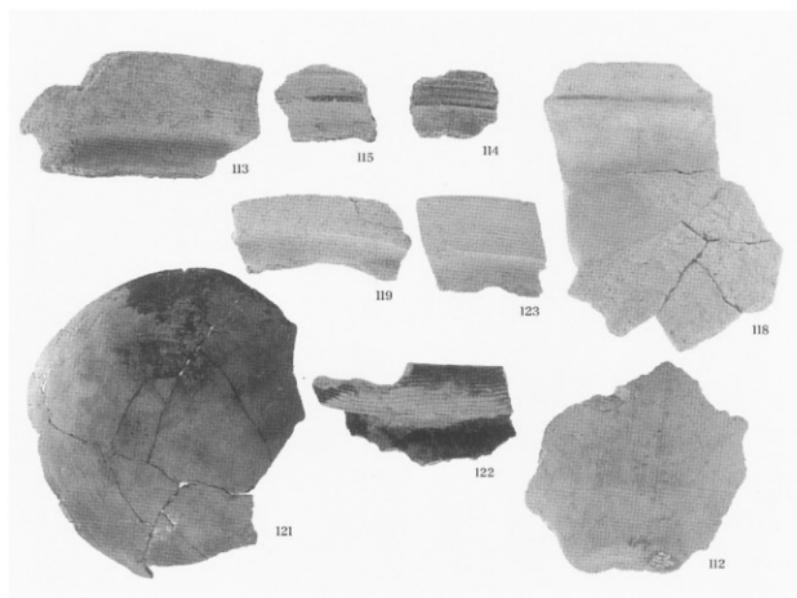
116

2. SI12出土土器

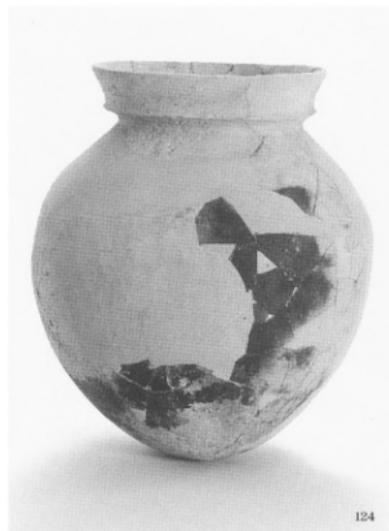


117

3. SI13出土土器



1. 積穴建物出土土器 (5) (SI11~13・16・17)



2. SX1 出土土器

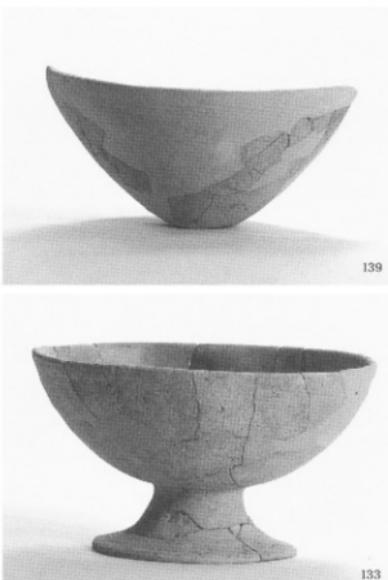


124・125
棺蓋装着状況



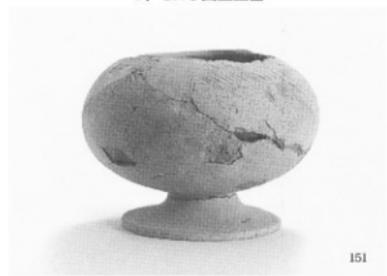
126

1. SX3出土土器



139

2. SX5出土土器



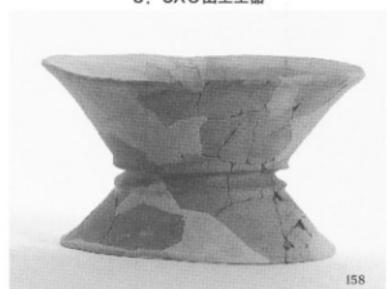
151

3. SX8出土土器



157

4. SK15出土土器



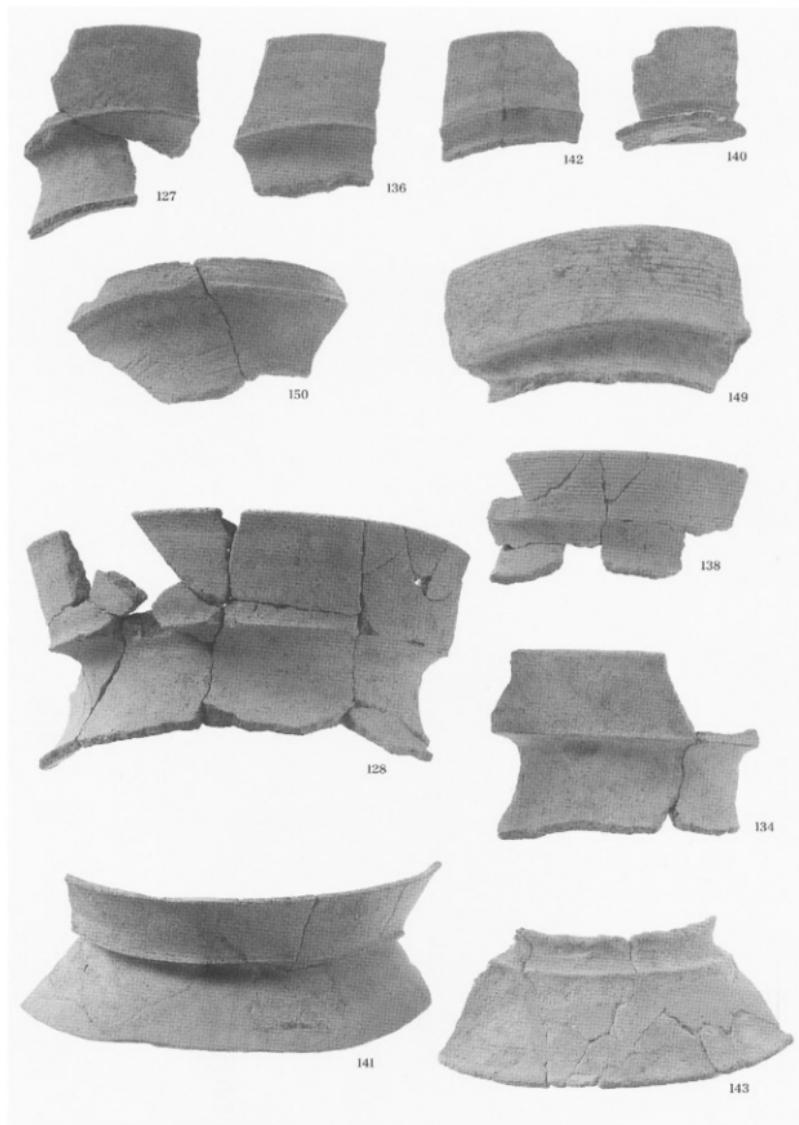
158



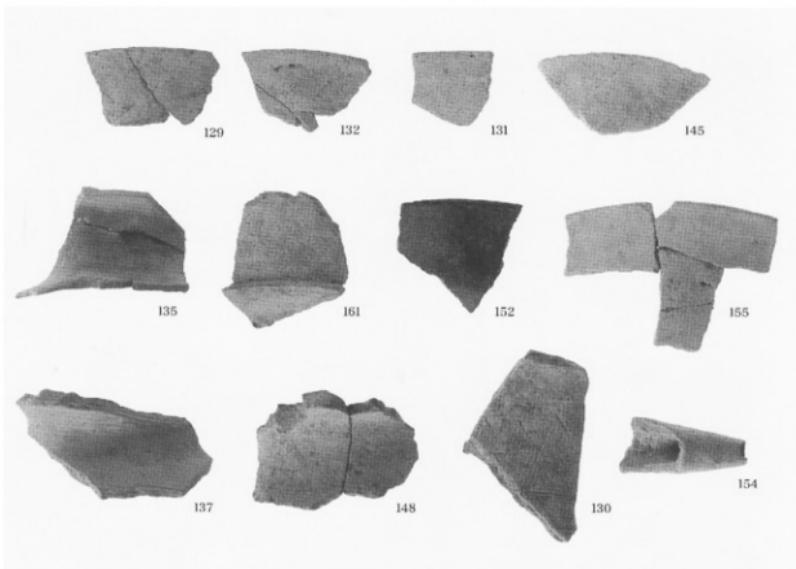
1. SK28出土土器



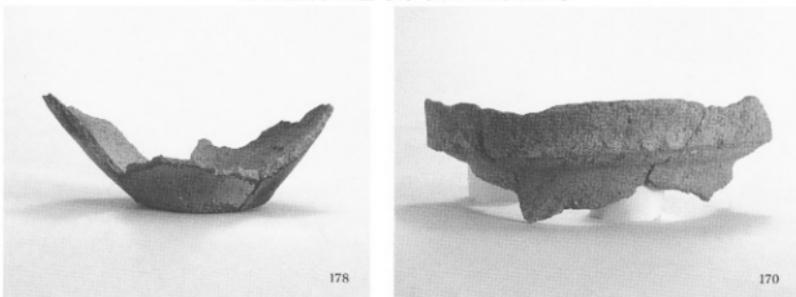
2. SD35出土土器



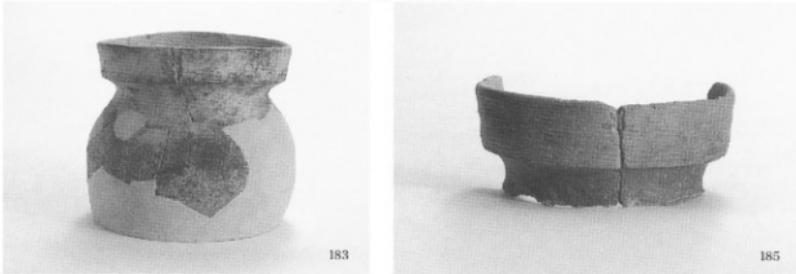
土壤墓出土土器（1）(SX3・5・6・8)



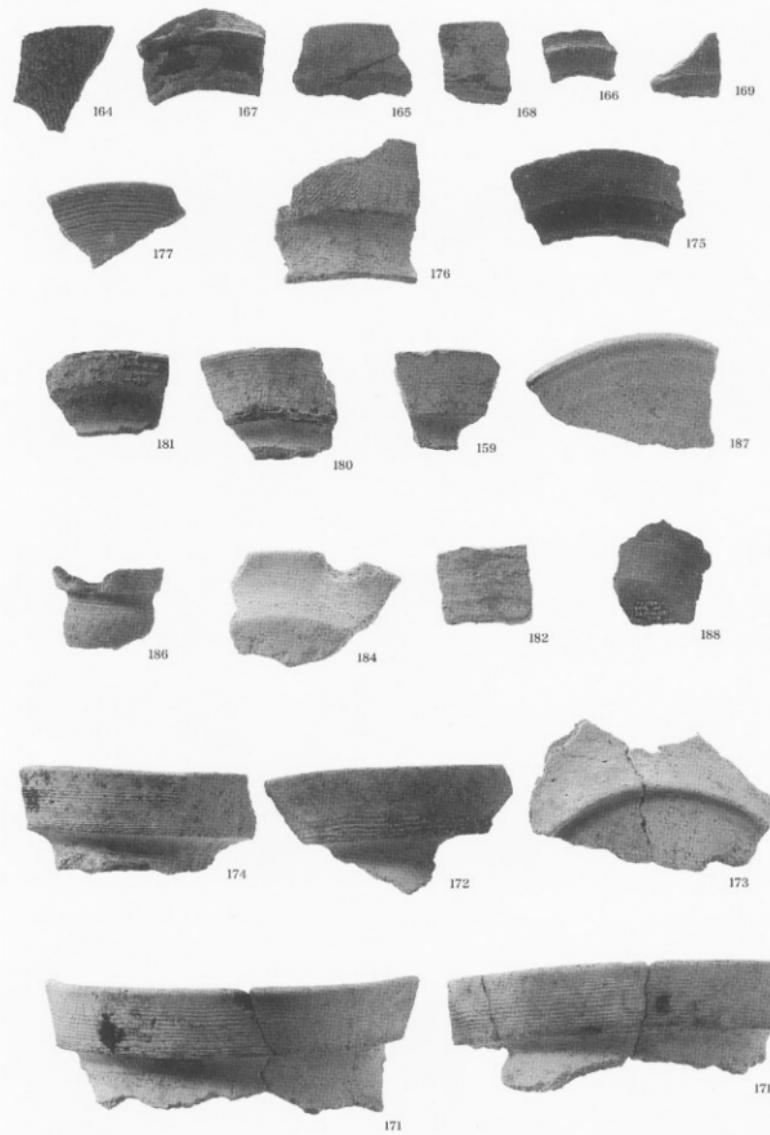
1. 土壙墓出土土器（2）(SX3～8、SK24)



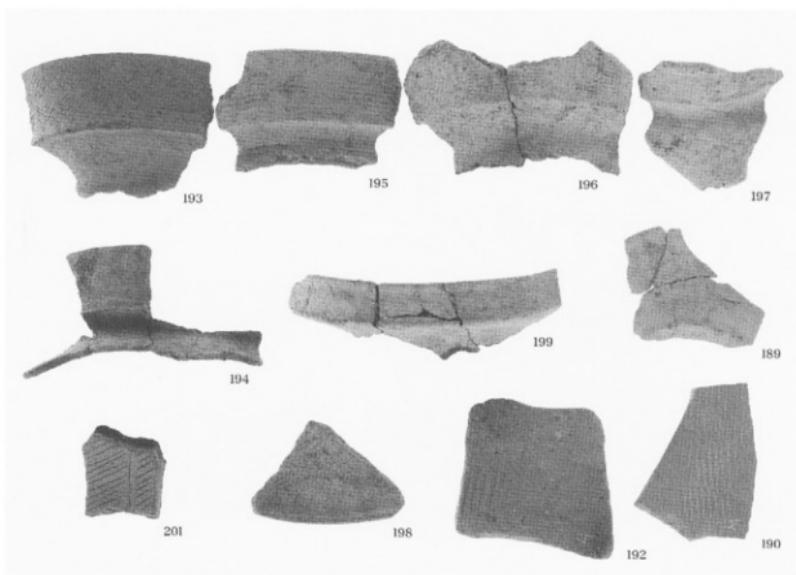
2. SK7出土土器



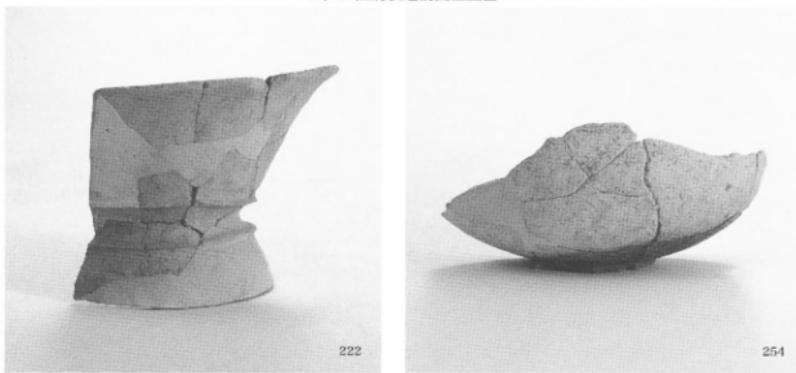
3. SK18出土土器



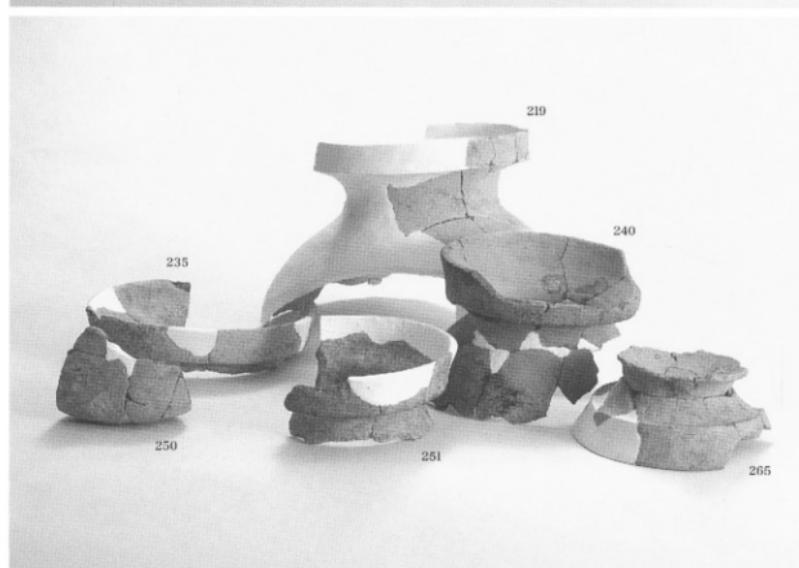
A区土坑内出土土器



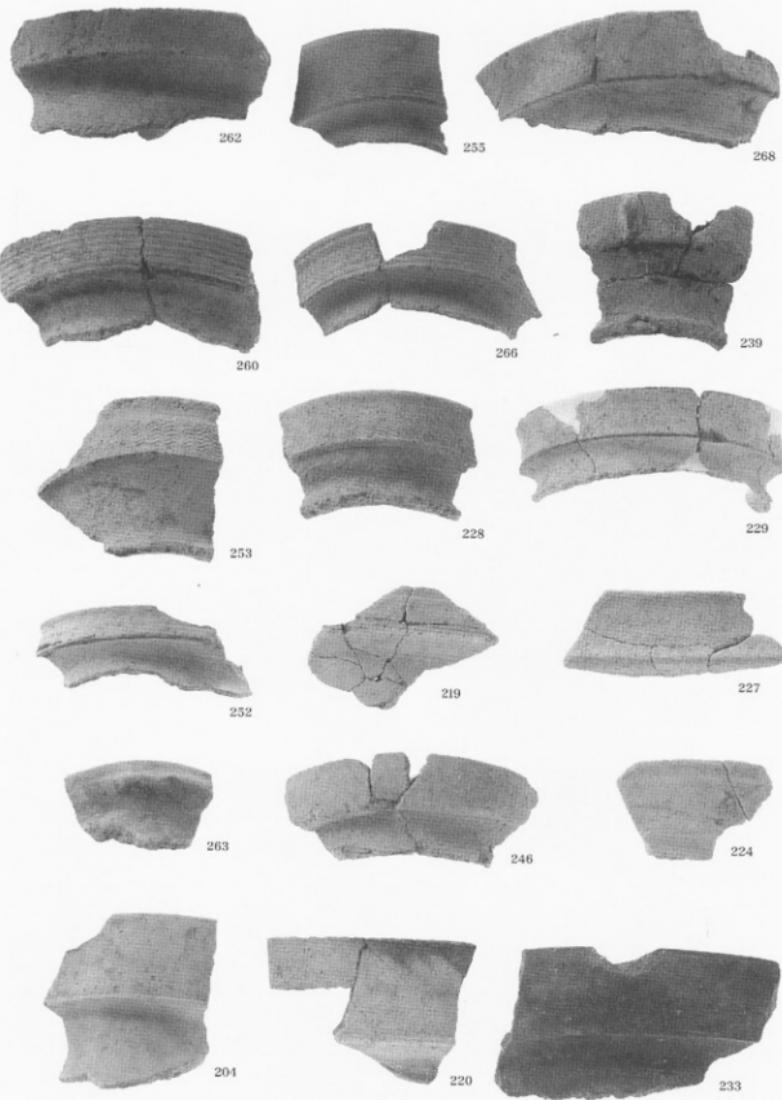
1. A区溝状遺構出土土器



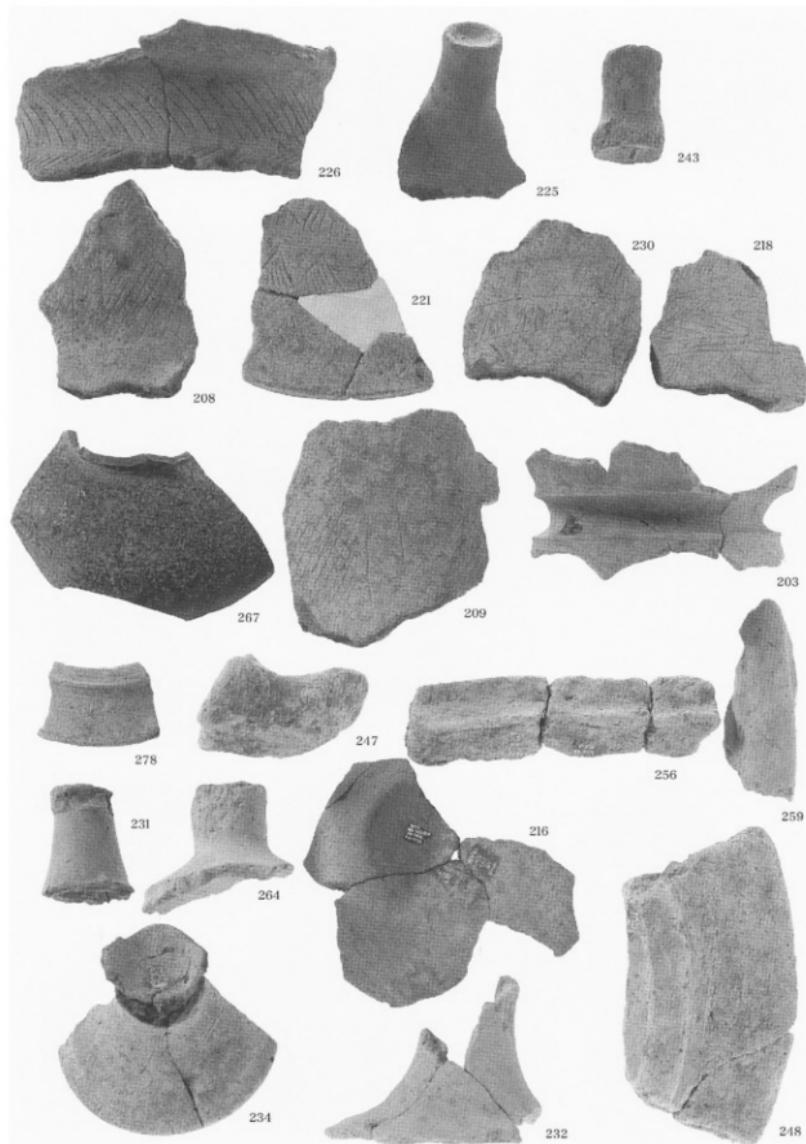
2. A区遺構外出土土器 (1)



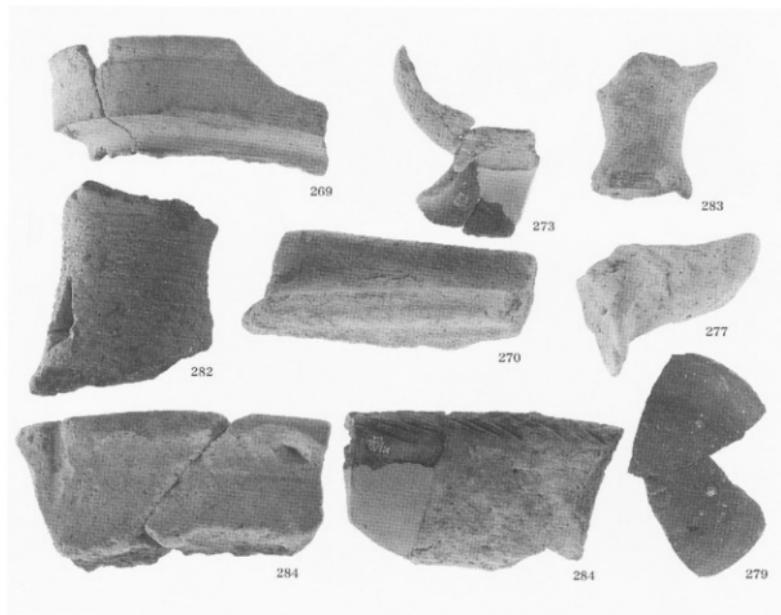
A区遺構外出土土器（2）



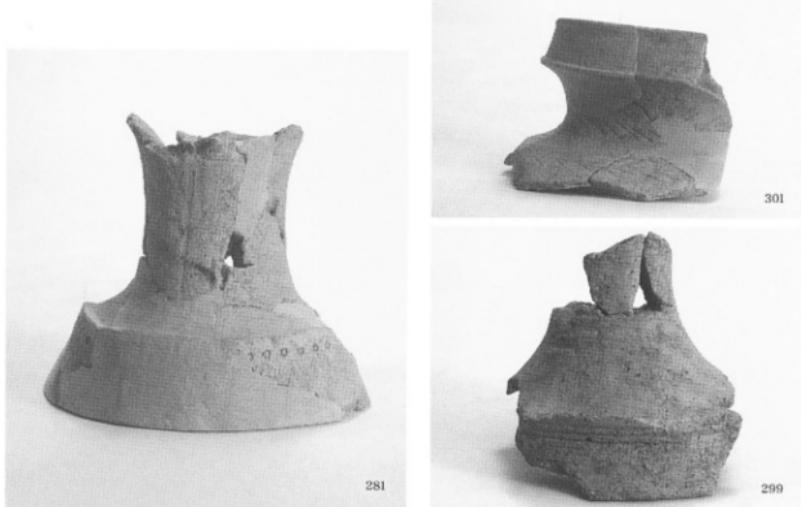
A区遺構外出土土器（3）



A区遺構外出土土器（4）

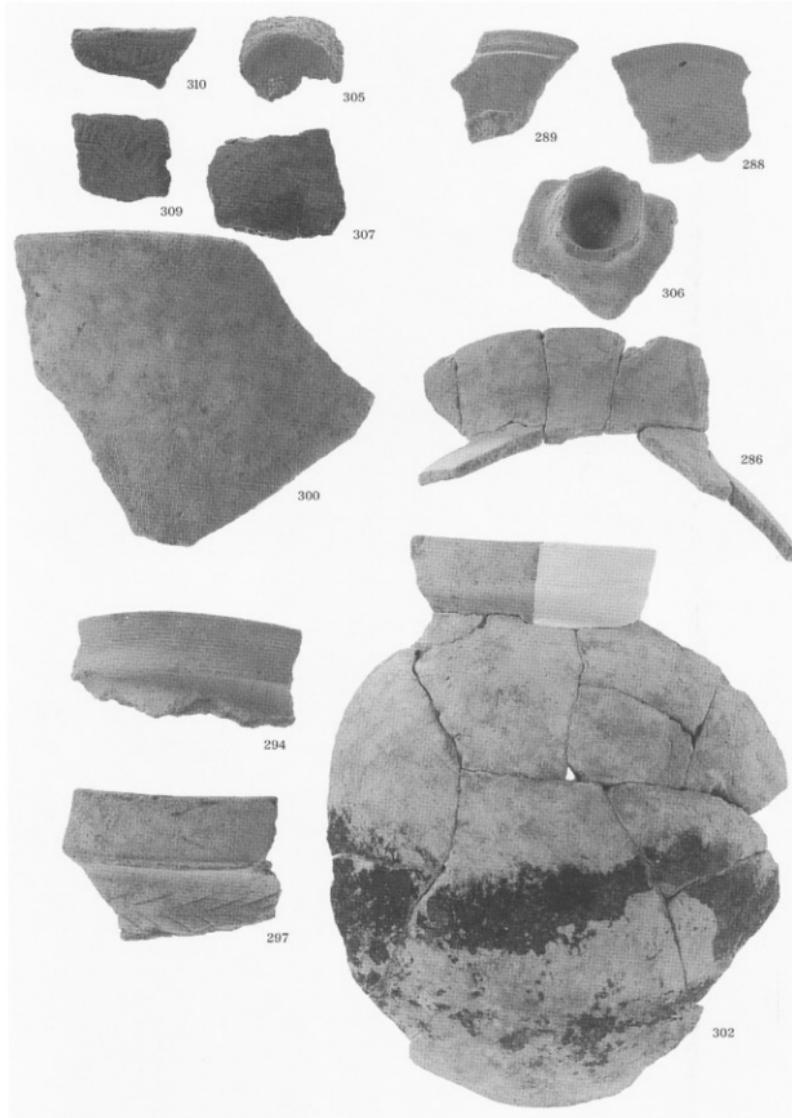


1. B区遺構外出土土器 (1)

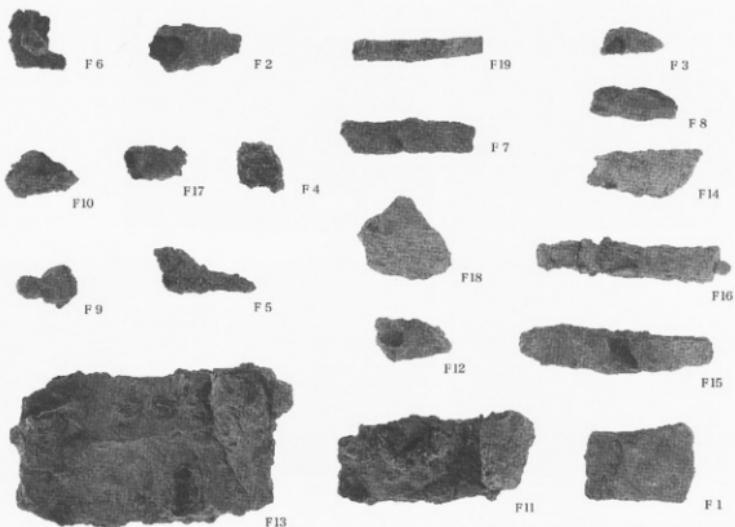


2. B区遺構外出土土器 (2)

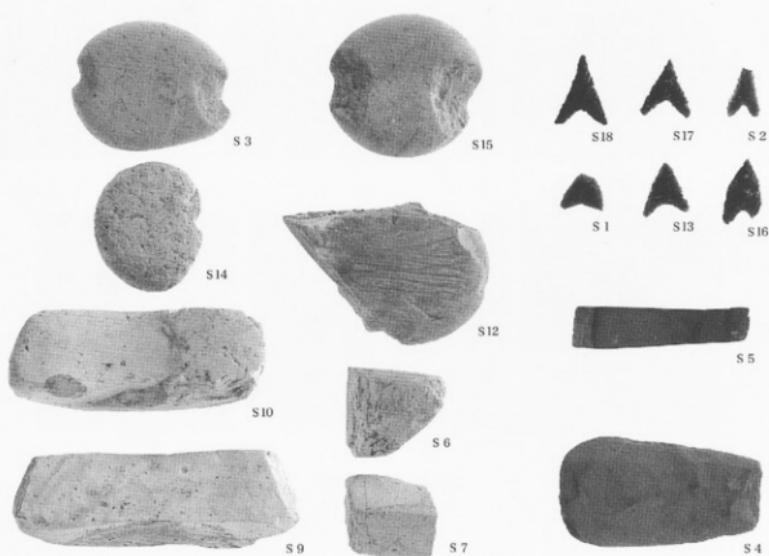
3. C区遺構外出土土器



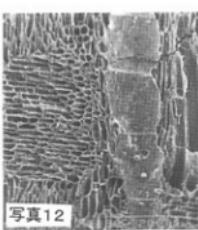
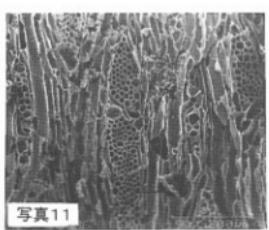
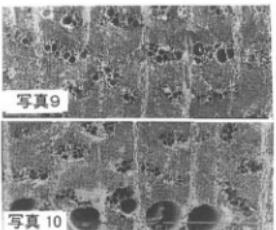
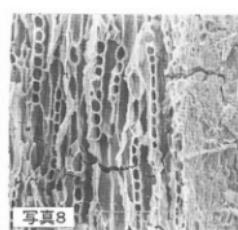
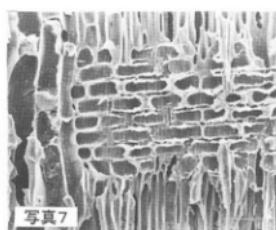
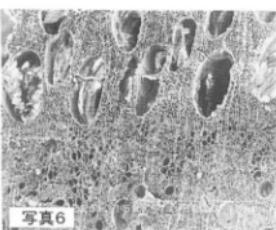
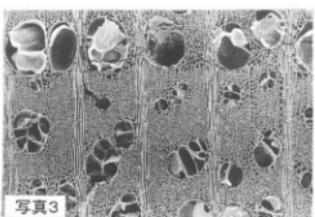
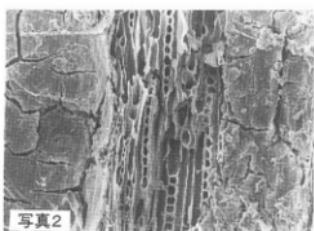
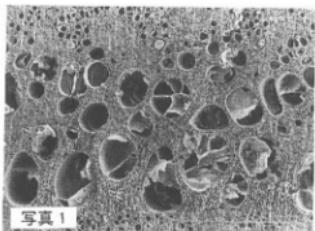
C区出土土器 (SI18 : 286・288・289)



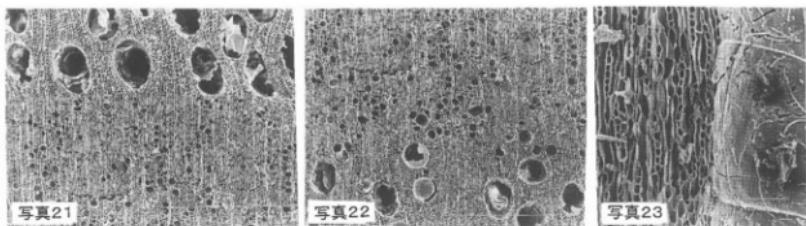
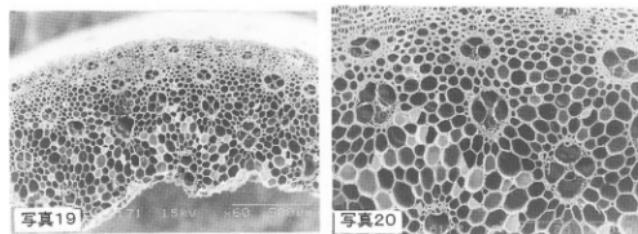
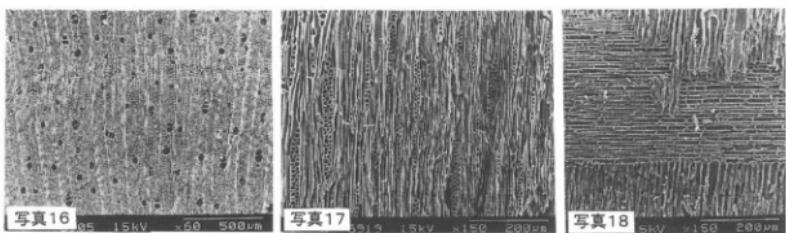
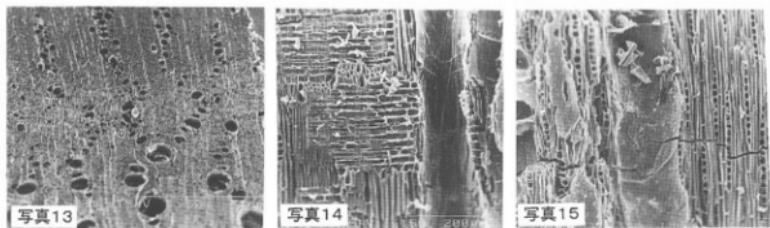
1. 鉄関連遺物



2. 石製品



出土木材顕微鏡写真1



出土木材顕微鏡写真2

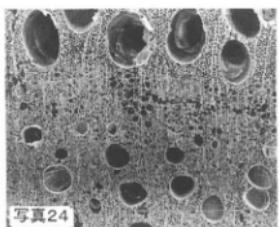


写真24

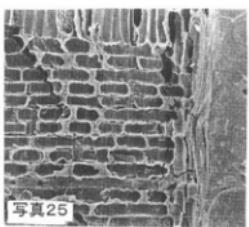


写真25

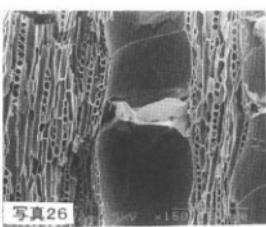
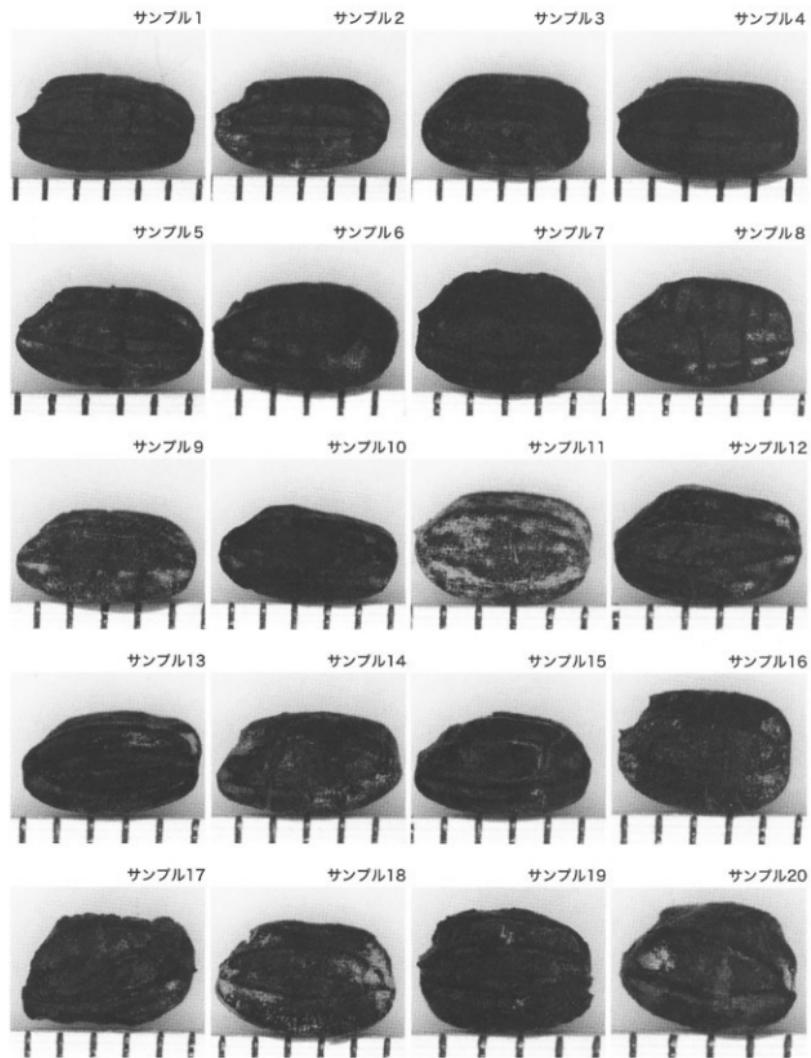
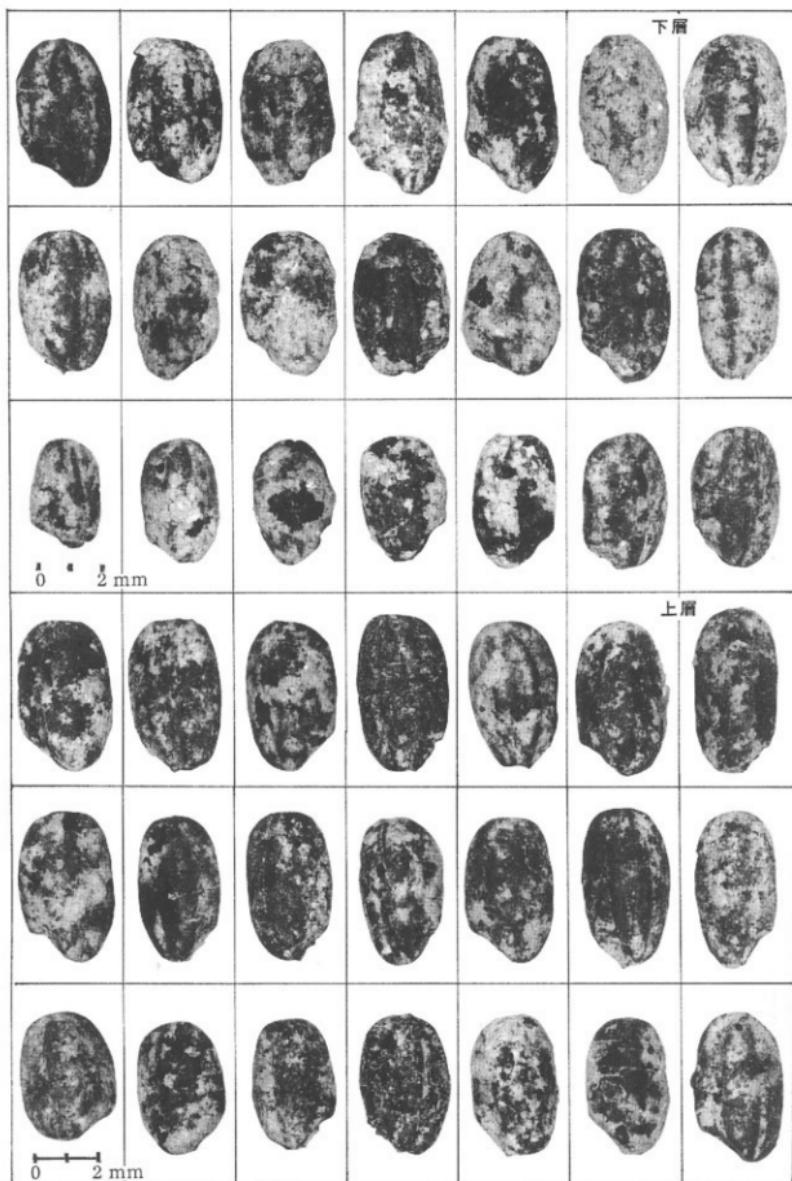


写真26

出土木材顕微鏡写真3

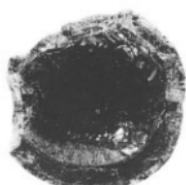
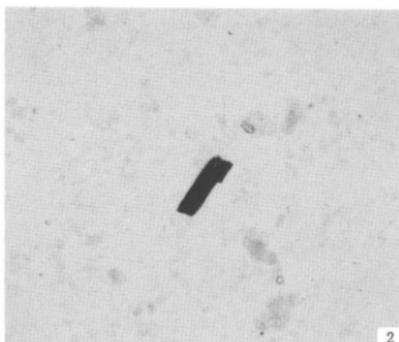
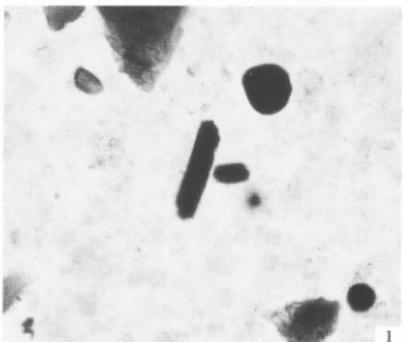


サンプルデジタル顕微鏡写真



井田地中ソネ遺跡の炭化米粒の接写写真

花粉分析プレバート内の状況写真・種実遺体



50 μ m 5 mm
(1, 2) (3)

1. 状況写真(SI9;床面直上土)
3. ムクロジ 種子(SI9)

2. 状況写真(SI15;床面直上土)

報告書抄録

ふりがな	いづちがしらいせき・いづちなかそねいせき						
書名	井団地頭遺跡・井団地中ソネ遺跡						
副書名	一般国道9号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	I						
シリーズ名	鳥取県教育文化財調査報告書						
シリーズ番号	80						
編著者名	君嶋 俊行、大野 哲二、岩井 美枝、坂本 嘉和、小谷 郁夫						
編集機関	財団法人 鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター						
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260 TEL (0857) 27-6717						
発行年月日	西暦2003年（平成15年）3月31日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所取遺跡	コード 所在地	北緯 市町村	東經 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
井団地頭遺跡	鳥取県東伯郡東伯町大字田越字井団地頭、大字三保字下瀧峯平ル	313688	222	35° 29' 07.6072"	133° 41' 05.7156" ~ 20021025	6,000m ²	一般国道9号東伯中山道路改築工事
井団地中ソネ遺跡	鳥取県東伯郡東伯町大字田越字井団地中ソネ、大字五輪谷	313688	299	35° 29' 08.7580"	133° 40' 59.3141" ~ 20021203	12,000m ²	一般国道9号東伯中山道路改築工事
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
井団地頭遺跡	集落	縄文時代 前・中・後・晚期	土坑		縄文土器、石鎚、石錐	前期 羽状繩文系土器 中期 船元式土器	
		弥生時代 前・中期	溝状遺構		弥生土器、石鍬	大型石鍬	
		古墳時代 前期	竪穴建物跡、土坑		土師器		
		7~8世紀	竪穴建物跡、溝状遺構、土坑		土師器、須恵器		
		時期不明	土坑、溝状遺構			落とし穴状土坑多数	
	方形区画	平安時代 後期	溝状遺構		土師質土器	館跡の可能性あり	
井団地中ソネ遺跡	集落	縄文時代	土坑		縄文土器		
		弥生時代 後期	竪穴建物跡、袋状土坑		弥生土器、石器、鉄製品	焼失竪穴建物跡	
		古墳時代 初期	土壙墓、土器棺墓、溝状遺構		土師器、鉄製品	区画溝、標石を伴う 土壙墓群	
		古墳時代 中期	竪穴建物跡、土坑		土師器、須恵器、炭化米	埋土に炭化米を含む土坑	
		時期不明	溝状遺構、土坑			古墳時代中期以降	

鳥取県教育文化財団発掘調査報告書 80

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡東伯町

井 図 地 頭 遺 跡
井図地中ゾネ遺跡

発 行 2003年3月31日

編 集 財團法人 鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 岩美郡国府町宮下1260

電話（0857）27-6717

発行者 財團法人 鳥取県教育文化財団

印 刷 山本印刷株式会社